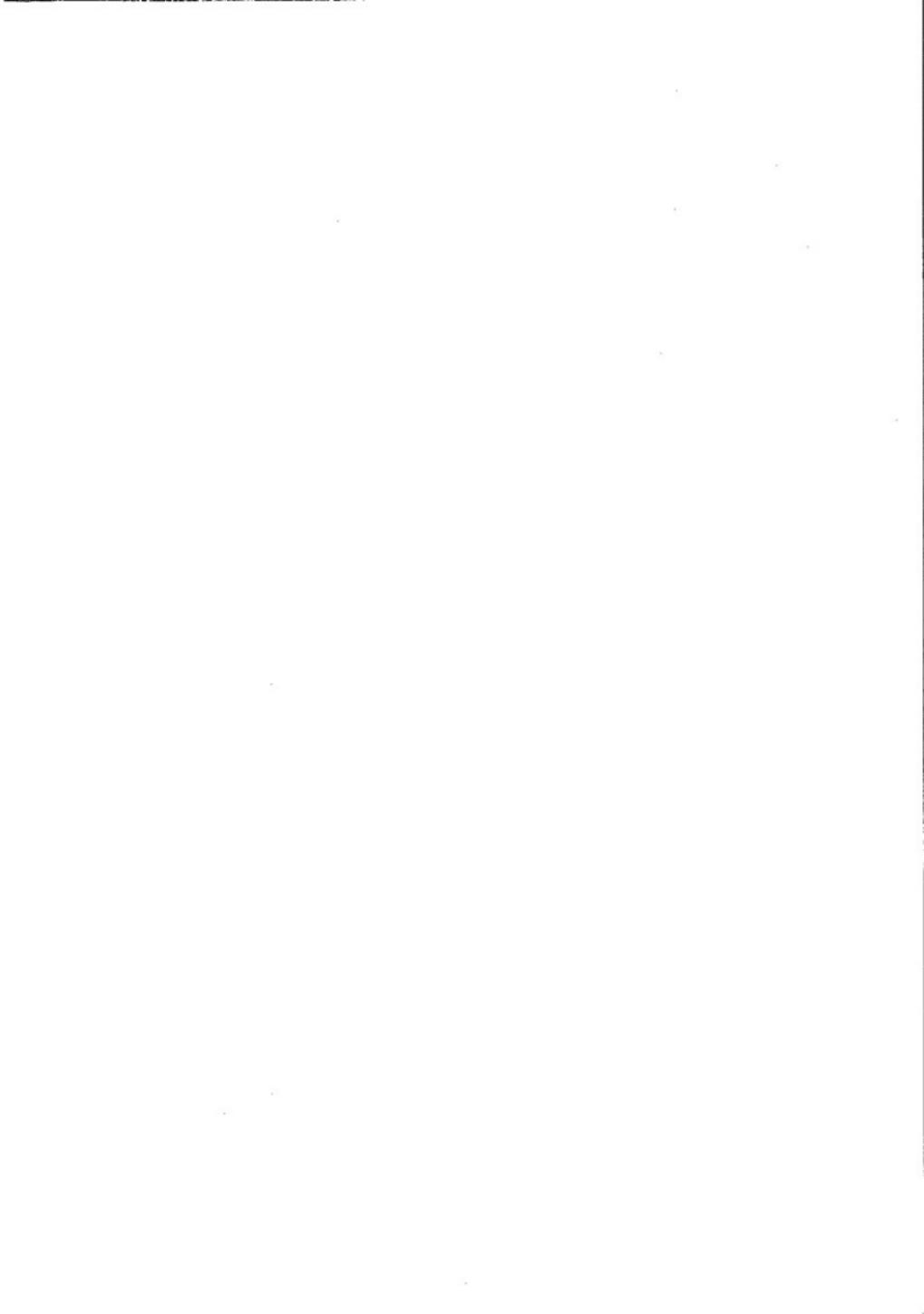


八尾南遺跡第18次発掘調査報告書

－大阪防衛施設局共同住宅建て替え工事に伴う－

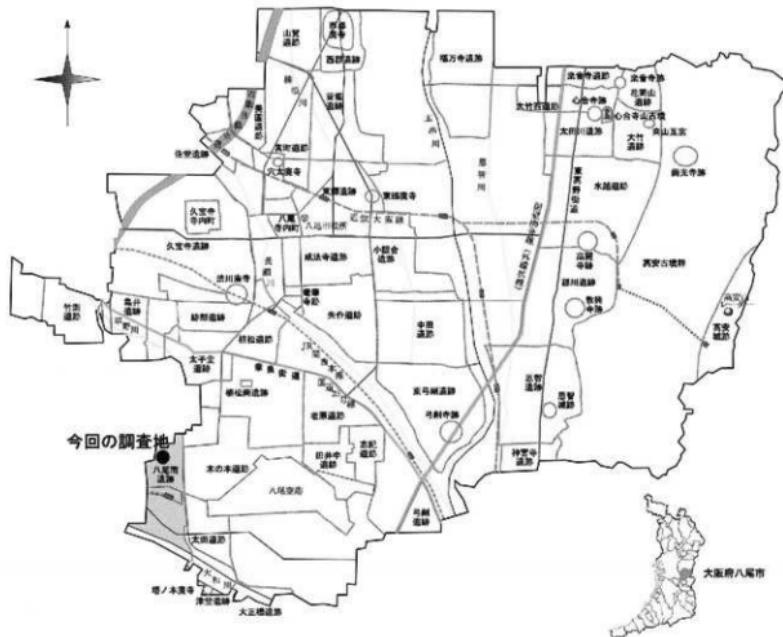
2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



八尾南遺跡第18次発掘調査報告書

－大阪防衛施設局共同住宅建て替え工事に伴う－



2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

今回報告書を刊行するに至った八尾南遺跡は、大阪府八尾市南西部の西木の本一丁目～四丁目、木本、若林町一丁目～三丁目に広がっています。

本遺跡は、昭和51(1971)年に大阪市営地下鉄谷町線の八尾南駅駅舎建設に先立つ試掘調査で発見された経緯を持つ遺跡です。

その後の発掘調査により、後期旧石器時代から近世に至る長期間に亘って継続した複合遺跡であることが明らかとなりました。

特に、後期旧石器時代では、西に接する大阪市の長原遺跡と共に標識遺跡として認識されているほか、古墳時代初頭から前期における中河内地域の古式土師器の編年を構築する過程で、数多くの良好な資料を提供しています。

また近年、(財)大阪府文化財センターによって八尾南遺跡範囲の南部で実施された発掘調査では、洪水堆積物によりパックされた弥生時代後期の集落跡が発見されており、当該期の集落の実態を推定するうえで、類を見ない一級資料と言えます。

今回報告する八尾南遺跡第18次調査は、大阪防衛施設局の共同住宅建て替え工事に伴うもので遺跡範囲の北部に位置しています。調査においては、古墳時代中期前半を中心として、初期須恵器や数多くの韓式系土器が出土しており、当該期の八尾南遺跡から長原遺跡東部・東北地区における渡来系の人々を中心とする集落との関わりを推定するうえで、大変重要な調査成果が得られました。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成20年9月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎健二

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市西木の本三丁目122で実施した大阪防衛施設局の共同住宅建て替え工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する八尾南遺跡第18次調査(YS92-18)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪防衛施設局から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成4年8月17日から平成4年9月26日(実働30日)にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約400m²を測る。なお、調査においては柴田達弥、千賀幸二、田中 賢、能勢尚樹、中西明美、松田恵一が参加した。
1. 内業整理業務は平成19年11月から平成20年2月にかけて、整理係の原田昌則・尾崎良史が行った。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－北原清子・山内千恵子、図面トレスース－山内、遺物写真撮影－北原、遺物図版作成－北原・尾崎が行った。本書の執筆、編集は原田が行った。
1. 現地調査および報告書作成にあたり以下の方々からのご協力とご指導を受けた。記して感謝いたします。(敬称略 所属は調査時点)
小田富士雄、武末純一(福岡大学)、亀島重則(大阪府教育委員会)、田中清美、平田洋司(大阪市文化財協会)、大阪防衛施設局

凡　　例

1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図(昭和61年測量・平成6年修正・平成8年7月編纂)を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
1. 本書で用いた方位は、国土座標第VI系〔日本測地系〕の座標北を示す。
1. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に準拠した。
1. 造構は下記の略号で示した。
掘立柱建物-SB 土坑-SK 溝-SD 小穴・柱穴-SP 落ち込み-SO
1. 造構図面の縮尺は適宜決定し、縮尺数値を提示した。
1. 遺物図面の縮尺は1/4を基本とするが、石製品については1/1。断面については、土師器・韓式系土器は白、須恵器は黒、石製品は斜線を用いた。
1. 本書で記述した古墳時代中期(5世紀)の時期概念と須恵器型式との関係は以下のとおりである。但し、提示した全ての須恵器型式が出土したわけではない。
前半-TG232・ON231・TK73・TK85・TK216(初期須恵器)
中葉-ON46・TK208
後半-TK23・TK47

本文目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 地理・歴史的環境	1
第3章 調査概要	7
第1節 調査の方法と経過	7
第2節 検出遺構と出土遺物	8
1) 基本層序	8
2) 検出遺構と出土遺物	10
第1面	10
第2面	21
3) 遺構に伴わない遺物	33
第4章 まとめ	34

挿図目次

第1図 調査地周辺図	2
第2図 調査区設定図	7
第3図 断面図	9
第4図 S B101平断面図	10
第5図 S K105、S K107、S K111出土遺物実測図	10
第6図 第1面平面図	11
第7図 S K105、S K107、S K111平断面図	12
第8図 S D101平断面図	14
第9図 S D101出土遺物実測図	15
第10図 S D102平断面図	16
第11図 S D102出土遺物実測図	16
第12図 S O101平断面図	18
第13図 S O101出土遺物実測図	19
第14図 烏足文タタキメ拓影	20
第15図 S B201~203平面図	21
第16図 S B201平断面図	21
第17図 第2面平面図	22
第18図 S B202~205平断面図	23
第19図 S B206平断面図	24
第20図 S K201平断面図	24
第21図 S K201出土遺物実測図	24

第22図	S K208断面図	25
第23図	S K208出土遺物実測図-1	25
第24図	S K208出土遺物実測図-2	26
第25図	S K209出土遺物実測図	26
第26図	S K209断面図	26
第27図	S D208出土遺物	27
第28図	S P242、S P251、S P255出土遺物実測図	31
第29図	S D301断面図	31
第30図	第3面平面図	32
第31図	第6層 出土遺物実測図	33
第32図	第7層 出土遺物実測図	33
第33図	八尾南遺跡(Y S 92-18)長原遺跡(N G 95-36)出土の鳥足文タタキメを持つ土器	35

表 目 次

第1表	周辺調査地一覧表	3
第2表	第1面 土坑法量表	13
第3表	第1面 溝法量表	16
第4表	第1面 小穴・柱穴法量表	17
第5表	玉類法量表	26
第6表	第2面 土坑法量表	27
第7表	第2面 溝法量表	27
第8表	第2面 小穴・柱穴法量表	28
第9表	八尾南・長原遺跡出土鳥足文タタキメ土器一覧表	36

図 版 目 次

図版 一	第1面全景 北西部遺構検出状況	図版 四	S O101他検出状況 S O101東部遺物出土状況
図版 二	S K103~105検出状況 S K107検出状況 S K111検出状況	図版 五	第2面全景 S B202、203検出状況
図版 三	S D101、S D102検出状況 S D101東部遺物出土状況 S D101東部遺物出土状況	図版 六	S K201検出状況 S K208検出状況 S K208遺物出土状況
		図版 七	S K209検出状況

- | | |
|--|---|
| S K209遺物出土狀況 | 圖版一二 S O101出土遺物 |
| S D301檢出狀況 | 圖版一三 S O101・S K208出土遺物 |
| 圖版 八 S K105、S K107、S K111、
S D101出土遺物 | 圖版一四 S K208出土遺物 |
| 圖版 九 S D101出土遺物 | 圖版一五 S K209、S D208、S P242、
S P251、S P255出土遺物 |
| 圖版一〇 S D101出土遺物 | 圖版一六 第6層、第7層出土遺物 |
| 圖版一一 S D101、S D102出土遺物 | |

第1章 調査に至る経過

八尾南遺跡は、大阪府八尾市南西部の西木の本一～四丁目、木本、若林町一～三丁目の東西約0.5km、南北約1.3kmに展開する後期旧石器時代から鎌倉時代に至る複合遺跡である。

本遺跡発見の経緯は、地下鉄谷町線延伸工事に先立って、昭和51(1976)年に八尾市教育委員会が行った遺構確認調査で古墳時代前期から中世に至る遺構・遺物が検出されたことによる。その後、昭和53(1978)年7月から昭和54(1979)年10月にかけて、八尾南遺跡調査会により地下鉄谷町線八尾南駅の駅舎部や検車場の約36,000m²について発掘調査が実施された結果、本遺跡が後期旧石器時代から中世に至る複合遺跡であることが確認された(山本ほか1981)。その後、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、当調査研究会、(財)大阪府文化財センターにより継続的に発掘調査が実施されており、後期旧石器時代から平安時代後期に至る膨大な考古学的資料が得られている。なかでも、後期旧石器時代の接合資料を含む石器類や、古墳時代初頭から前期の古式土師器の一括資料については、当該期の中河内地域を代表する標識資料として学史にその名前を残している。

今回報告する八尾南遺跡第18次調査(Y S 92-18)は、八尾市西木の本三丁目122で実施した大阪防衛施設局の共同住宅建て替え工事に先立って実施したものである。調査面積は約400m²を測る。現地発掘調査は、防衛庁・八尾市教育委員会・当調査研究会との三者間協定に基づき、当調査研究会が事業者から委託を受け実施した。現地発掘調査は平成4年8月17日から平成4年9月26日である。報告書作成に関わる整理業務は、平成19年11月から平成20年2月にかけて整理係が行った。

第2章 地理・歴史的環境

八尾南遺跡は、大阪府八尾市南西部に位置する後期旧石器時代から鎌倉時代に至る複合遺跡である。当遺跡の存在する八尾市は大阪府の東部に位置し、東は奈良県生駒郡平群町、西は大阪市平野区、南は柏原市・藤井寺・松原市、北は東大阪市と隣接している。

八尾南遺跡に隣接する遺跡としては、東には木の本遺跡、太田遺跡(八尾市)、南および南東には大和川を挟んで津堂遺跡(八尾市・藤井寺市)、塔ノ本廃寺(八尾市)、若林環濠集落跡、大堀町所在遺跡(松原市)、西から北には長原遺跡(大阪市)が位置している。

八尾市の位置する中河内地域の地形は、河内平野と呼称されている河内低地が南北方向に広がる平野部を中心として、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵から北方に連なる河内台地、西には河内台地よりさらに北方に伸びる上町台地からなる。八尾南遺跡はこれらの地勢を呈する中河内地域の南東部に位置し、河内台地の北端部から河内平野(河内低地)にかけての標高10m前後に立地している。以下、周辺遺跡を中心に時期毎に概観する。

後期旧石器時代の遺物は、西接する長原遺跡のN G 14次で昭和54(1979)年に旧石器が発見され以来、長原遺跡の東南地区・東北地区、八尾南遺跡の南部から太田遺跡の南西部を中心に遺物の検出例が増加している。長原遺跡では、N G 82-41次、N G 85-13次、N G 86-64次、N G 88



第1図 調査地周辺図(S=1/5000)

第1表 周辺調査地一覧表（小規模な調査区を除く）

番号	遺跡名(略号)	調査機関	面積(m ²)	種別	主な時代	文 献
1	八尾南第1次 (TS82-01)	八文研	2600	墓域 居住域	弥生～古墳 平安～鎌倉	脇沢教「3. 八尾南遺跡(第1次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告5)
2	八尾南第2次 (TS83-02)	*	2500	墓域 生産域	弥生～古墳 奈良～鎌倉	脇沢教「1. 八尾南遺跡(第2次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告7)
3	八尾南第3次 (TS84-03)	*	900	生産域・居住域	古墳 平安	原田昌樹「3. 八尾南遺跡(第3次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告9)
4	八尾南第4次 (TS85-04)	*	630	居住域	弥生～古墳	脇沢教「3. 八尾南遺跡(第4次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告11)
5	八尾南第5次 (TS86-05)	*	4500	牛込城 生産域	弥生 古墳	脇沢教「7. 八尾南遺跡(第5次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告15)
6	八尾南第6次 (TS86-06)	*	120	牛込城	古墳～平安	脇沢教「8. 八尾南遺跡(第6次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告16)
7	八尾南第7次 (TS87-07)	*	3043	生産域	古墳 平安～鎌倉	西村会助「V. 八尾南遺跡(第7次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告4)
8	八尾南第8次 (TS87-08)	*	9961	墓域・居住域	弥生～古墳	原田昌樹「1. 八尾南遺跡(第8次調査)」(財)八尾南遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告47)
9	八尾南第9次 (TS87-09)	*	205	山谷带	弥生	脇沢教「10-11. 八尾南遺跡(第9次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告16)
10	八尾南第10次 (TS88-10)	*	696	生産域・居住域	古墳 平安	或澤泰子「12. 八尾南遺跡(第10次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告16)
11	八尾南第11次 (TS88-11)	*	100	包含層	弥生～古墳	或澤泰子「1984 [2]. 八尾南遺跡(第11次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告25)
12	八尾南第12次 (TS88-12)	*	860	墓域	古墳	或澤泰子「13. 八尾南遺跡(第12次調査)」(財)八尾南遺跡(第4次文化財調査研究会報告47)
13	八尾南第13次 (TS88-13)	*	1800	牛込城・居住域 河岸	弥生 古墳 平安	或澤泰子「18. 八尾南遺跡(第13次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告25)
14	八尾南第14次 (TS89-14)	*	100	山谷带	古墳 鎌倉	高橋千秋「19. 八尾南遺跡(第14次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告28)
15	八尾南第15次 (TS89-15)	*	846	河岸域	縄文 弥生	脇沢教「19. 八尾南遺跡(第15次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告28)
16	八尾南第16次 (TS89-16)	*	97.38	-	-	高橋千秋「19. 八尾南遺跡(第16次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告28)
17	八尾南第17次 (TS90-17)	*	436	居住域	弥生	原田昌樹「1995 [5. 八尾南遺跡(第17次調査)」(財)八尾南遺跡(第8次文化財調査研究会報告47)
18	八尾南第18次 (TS92-18)	*	352	居住域	古墳	本書未載
19	八尾南第19次 (TS93-19)	*	700	居住域	弥生 古墳	寺谷公介「19. 八尾南遺跡(第19次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告45)
20	八尾南第20次 (TS94-20)	*	46	包含層	弥生	高橋千秋「1995 [29. 八尾南遺跡(第20次調査)」(平成6年)八尾市文化財調査研究会報告5)
21	八尾南第21次 (TS94-21)	*	708	居住域	弥生～古墳	堤田昇「1998 V. 八尾南遺跡(第21次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告61)
22	八尾南第22次 (TS95-22)	*	340	包含層	弥生～古墳	高橋千秋「1998 V. 八尾南遺跡(第22次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告54)
23	八尾南第23次 (TS95-23)	*	200	居住域 生産域	弥生 平安～近世	高田信一「1999 IV. 八尾南遺跡(第23次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告63)
24	八尾南第24次 (TS95-24)	*	34	包含層	古墳	高橋千秋「1999 IV. 八尾南遺跡(第24次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告63)
25	八尾南第25次 (TS99-25)	*	294	居住域	弥生 古墳 平安～近世	高橋千秋「2000 V. 八尾南遺跡(第25次調査)」(平成11年)八尾市文化財調査研究会報告69)
26	八尾南第26次 (TS2004-26)	*	50	牛込城 生産域	古墳 平安	高橋千秋「2005 [3]. 八尾南遺跡(TS2004-26)の調査」(八尾市立理研文獻館セミナー報告5)
27	八尾南第27次 (TS2005-27)	*	1419	包含層 牛込城	古墳 平安～近世	丹羽裕弘「2005 [V. 八尾南遺跡(第27次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告102)
28	長原遺跡第1次 (N88-01)	*	8	-	-	或澤泰子「1989 [2]. 長原遺跡(第1次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告25)
29	八尾南遺跡 輪郭構造発見	古教委	190	山谷带 生産域	古墳 平安	米田義典「1991 [1. 八尾南遺跡(第1次調査)」(八尾市文化財調査研究会報告6)
30	八尾南遺跡	*	-	-	-	大日本報知社「1993 [八尾市立理研文獻館セミナー報告1990-1991年]」(財)八尾市文化財調査研究会報告19)
31	八尾南遺跡	*	約232	居住域	弥生～古墳	木下正志「1995 [4. 八尾南遺跡の調査]」(八尾市立理研文獻館セミナー報告11)
32	八尾南遺跡 八尾調査会	36000	牛込城・墓域・平石古石・純文・弥生 居住域	弥生 古墳	山田敏哉「1. 八尾南遺跡 - 平石古石調査と追跡2号施設1件」(八尾市立理研文獻館セミナー)・八尾南遺跡発掘会	
33	長原遺跡 長原調査会 鶴見区役所	9000	墓域・居住域 牛込城	古墳 平安	1982 「大阪府平野区長原遺跡発掘調査II」(大阪府立理研文獻館セミナー報告5)	
34	八尾南遺跡	府教委	-	-	旧石器	柳田真人「1989 [V. 八尾南遺跡-旧石器出土上野3地点]」大阪府教育委員会
35	八尾南遺跡	*	3016	居住域	弥生 古墳	山田隆一・吉野浩一「1991 [八尾南遺跡発掘調査会報告3-大正川流域調査実績に伴う]」大阪府教育委員会
36	九条塚跡 (NG82-26)	大文協	-	河岸	縄文 古墳	1982 「九条塚跡(大文協)」(大阪府立理研文獻館セミナー報告5)
37	長原遺跡 (NG82-20・41)	*	20	牛込城・居住域	古墳 古墳	1999 「長原遺跡発掘調査報告VII」
38	長原遺跡 (NG86-3・64)	*	2270	自然底路	臼石器～近世	2006 「長原遺跡発掘調査報告XV」
39	長原遺跡 (NG83-56)	*	650	集落	古墳	2006 「長原遺跡発掘調査報告XXV」
40	長原遺跡 (NG90-11)	*	1008	包含層 牛込城	縄文～飛鳥 平安～近世	2002 「長原遺跡発掘調査報告IX」
41	八尾南遺跡 大文七	1200	牛込城・居住域	弥生 古墳 平安	直瀬栄治子「2008 [八尾南遺跡]」大阪府文化財センター調査報告、第172号	
42	長原遺跡 (NG01-32)	大文協	780	自然底路 牛込城	弥生 古墳	2003 「長原遺跡発掘調査報告X」

番号	遺跡名(略号)	調査機関	面積(m ²)	種別	主な時代	文 獻
43	長原遺跡 (NG96-103)	大文協	-	生産域	縄文・弥生・古墳	1997「大阪府池田市長原東第2住居建設に伴う長原遺跡発掘調査報告書」 長原遺跡発掘調査報告書
44	長原遺跡 (NG97-85)	*	-	自然流路・生産域	縄文・弥生・古墳	1990「長原遺跡発掘調査報告書」 長原・平安 89-85略報
45	長原遺跡 (NG99-1)	*	168	居住域	後期旧石器・平安	1999「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書X III」
46	長原遺跡 (NG99-19)	*	960	生産域・居住域	後期旧石器・縄文・古墳	1999「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書X」
47	長原遺跡 (NG99-62)	*	960	自然河川・居住域	石器器・弥生・古墳	1999「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書X」
48	長原遺跡 (NG98-36)	*	229	居住域・生産域	古墳・弥生・近世	1995「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書VII」
49	長原遺跡 (NG88-66・91-12)	*	200	古墳群	古墳	1997「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書X I」
50	長原遺跡 (NG88-152)	*	519	生産域・居住域	古墳・鍛冶	1996「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書V II」
51	長原遺跡 (NG90-62)	*	400	自然流路	石器器	1991「平成2年度大阪市内所蔵文化財保有地発掘調査報告書」
52	長原遺跡 (NG97-10)	*	668	墓域・居住域・丘陵	縄文・弥生・飛鳥	1995「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書V III」
53	長原遺跡 (NG88-1)	*	522	墓域	弥生	1995「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書V III」
54	長原遺跡 (NG88-29・37)	*	905	自然河川・生産域	後期旧石器・鍛冶	1995「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書V III」
55	長原遺跡 (NG89-22)	*	279	生産域・居住域	後期旧石器・縄文・古墳	1997「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書I X」
56	長原遺跡 (NG87-60)	*	945	墓域	古墳	1994「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書V II」
57	長原遺跡 (NG85-13・42)	*	1400 134	居住域・牛塚域・墓域	後期旧石器・古墳・鍛冶	1993「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書V」 1995「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書VII」
58	長原遺跡 (NG89-48)	*	440	生産域・居住域	先秦・秦漢・古墳・古墳	2006「長原遺跡発掘調査報告書V V」
59	長原遺跡 (NG95-1)	*	1158	生産域・居住域	後期旧石器・縄文・古墳	2006「長原遺跡発掘調査報告書V V」
60	長原遺跡 (NG88-23)	*	255	生産域	弥生・鍛冶	1995「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書V III」
61	長原遺跡 (NG88-4)	*	400	生産域・居住域	田石器・弥生・古墳	1999「長原遺跡発掘調査報告書V II」
62	長原遺跡 (NG91-29)	*	7	-	-	1997「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書X I」
63	長原遺跡 (NG92-54)	*	79	自然河川・生産域・居住域	石器器・縄文・弥生	1999「長原遺跡発掘調査報告書V II」
64	長原遺跡 (NG88-15)	*	519	居住域	縄文・古墳	1995「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書V III」
65	長原遺跡 (NG94-83)	*	43	居住域	田石器・古墳・飛鳥・奈良	2006「長原遺跡発掘調査報告書V V」
66	長原遺跡 (NG92-83)	*	88	生産域	中世	2006「長原遺跡発掘調査報告書V V」
67	長原遺跡 (NG89-37)	*	680	石器散布地	印石器	1997「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書V」
68	太田遺跡 (太田2006-366)	市教育委員会	56.25	居住域	古墳時代	豊田市長原2007-1-1「太田遺跡(2006-366)の調査」 豊田市中央16号地発掘調査報告書

#調査機関

市教委：八尾市教育委員会
府教委：大阪府教育委員会
大文協：(財)大阪府文化財センター
大文協：(財)大阪市文化財協会

八文協：(財)八尾市文化財調査研究会

大文協：(財)大阪府文化財センター

長原調査会：長原遺跡調査会

#

- 4・29・37・59・69次、NG89-19・22・37次、NG95-72次、NG97-12・52次、NG99-41次、NG00-11、八尾南遺跡ではYS83-2(第2地点)、1987年府教委調査地(第3地点)・1989~1990年府教委調査地(第6地点)、太田遺跡のO O T 2006-8次ほかで数多くの石器類が発見されている。この付近一帯で後期旧石器が集中して発見された要因としては、両遺跡の南部一帯が、河内台地の北端から河内低平地に移行する地点にあたり、当該期以降の沖積作用が緩慢で、現地表面から比較的浅い位置に石器を含む長原地山(NG13層)が存在することによる。また降灰時期が明らかな始良-Tn火山灰(AT)に対比される平安神宮火山灰層などの広域火山灰を基準として、各地点の石器群の位置付けが行われている。

縄文時代のものとしては、八尾南遺跡のYS83-2次、YS87-8次、長原遺跡のNG14次等から出土した草創期に比定される有茎尖頭器の出土があるが、遺構として確認されたものはない。縄文時代早期のものとしては、長原遺跡東北地区のNG99-41次で検出されている。押型文、撲糸文土器を中心とする早期中葉の土器のほか、住居跡の可能性がある落ち込みが検出されている。縄文時代中期の遺構・遺物の検出例も少なく、長原遺跡東北地区のNG97-12次、NG99-41次

他で検出されている程度である。集落域が拡大・分散するのは縄文時代後期以降で、後期では八尾南遺跡のYS89-15次、長原遺跡の東・東北地区のNG14次で竪穴住居、NG97-56次およびNG99-19次で流路と自然堤防が検出されている。晚期では、長原遺跡東南地区のNG81-10次で居住域と墓域が検出されており、畿内における数少ない当該期の集落構造を考えるうえで貴重である。また長原遺跡から出土した縄文時代晚期最終末を代表する「長原式土器」は、当該期の標識土器として位置付けられている。

弥生時代前期においては、八尾南遺跡ではYS89-15次で前期古段階の広口壺、YS86-5次からは前期中段階の河川内からしがらみが検出されている他、長原遺跡東部地区のNG03-6次では土器棺墓・土壙が検出されている。弥生時代中期においては、中期前半においては、八尾南遺跡のYS89-17次で居住域、NG82-20次、NG82-41次、NG88-4次、NG88-84次で生産域、中期中葉から後半では長原遺跡東北地区のNG02-1次、NG04-3次で居住域、長原遺跡東地区のNG95-36次、NG99-15次、NG02-8次、NG03-6次で居住域と墓域、長原遺跡東南地区のNG88-1次で墓域が検出されている。なかでもNG99-15次では、送風管やとりべ形土器が出土しており、集落内の青銅器生産が想定されている。弥生時代後期においては、後期前半の集落が遺跡範囲南端部分で2002~2004年に大阪府文化財センターより実施された調査で検出されている。自然河川により区画された居住域内に多数の竪穴住居、掘立柱建物を配する集落景観が想定されており、当該期の居住単位や居住領域を推定するうえで指標となろう。後期後半の居住域は、八尾南遺跡範囲中央部の八尾南遺跡調査会(B-1・C-1地区)、YS84-2次、YS87-8次、南部ではYS95-23次、YS99-25次、YS94-21次、北部ではYS88-11次で居住域が確認されている。墓域としては、YS87-8次で1基、YS82-1次で方形周溝墓12基が検出されている。長原遺跡内では、NG84-6次、NG95-36次、NG99-15次、NG02-8次、NG03-6次で居住域、NG82-20・41次、NG85-13次で墓域が検出されている。

古墳時代初頭(庄内式期)の居住域は、八尾南遺跡では八尾南遺跡調査会(D-1~D-3地区)と府教委1989調査地ならびに東の太田遺跡(太田2005-366)、長原遺跡ではNG84-86次で検出されおり、前代に比して居住域の拡大化と分散化が図られている。墓域としては、八尾南遺跡調査会(D-3地区)の八尾南2号墳の他、長原遺跡では、東地区のNG84-6次、NG02-8次、NG03-6次で方形・円形周溝墓で構成される墓域が検出されている。古墳時代前期(布留式期)の居住域は、八尾南遺跡では、前代の居住域を踏襲する形で推移している。長原遺跡では、布留式新相段階の居住域がNG98-19・20次、NG00-6次を中心とする東北地区で検出されている。布留式期の古墳としては、八尾南遺跡内では八尾南遺跡調査会(B-3地区)の八尾南1号墳、長原遺跡内では塚ノ本古墳、NG02-8次の長原213号墳がある。

古墳時代中期の集落は、八尾南遺跡調査会(C-4・D-1地区)で前代から継続して居住域が営まれている他、新たに居住域が広範囲に分散して成立している。遺跡北部では、YS84-3次、YS92-18次ならびに北東方向の長原遺跡東地区のNG84-6次、NG87-67次、NG95-36次、NG99-15次、NG02-8次、NG03-6次を含めた一帯。遺跡中央部から南部では八尾南遺跡調査会(C-4・D-1地区)・YS87-8次から長原遺跡東南地区のNG82-41次を含めた集落域が想定される。これらの集落域の広がりは、長原遺跡で古墳時代中期初頭に出戸自然堤防上に成立した「東集落」を構成した居住域群に位置付けられる。これらの集落に関連した古墳として

は、YS83-2次で1基、YS87-8次で3基、YS88-12次で4基が検出されている他、西接する長原遺跡内の長原古墳群の東部で検出された古墳についても、これらの集落と有機的な関係が推定される。当該期においては、須恵器・韓式系土器に代表される新出土器の出現に伴う厨房様式の変化、YS87-8次出土の木製鞍から推定される馬飼養等の生活様式の変化が窺われる。長原遺跡東地区のNG02-8次では、「コ」の字形の溝を伴う鉄鍛冶工房やNG99-15次調査では、大壁建物が検出されており、渡来系もしくは渡来人と密接な関係を持った在来集団が想定される。しかし、古墳時代後期前半を境として集落域の減少傾向が顕著に認められている。このような傾向は西接する長原遺跡においても同様で、長原古墳群の終焉時期とも符合しており、この時期に社会情勢に大きな変化が生じたものと推定される。

飛鳥・奈良時代の遺構・遺物は八尾南遺跡内では希薄である。長原遺跡では東北地区のNG95-57次、NG96-9・66次、NG97-13・43・56次、NG98-20次、NG00-6次、NG01-14次、NG04-3次付近一帯で長期間に亘って比較的安定した居住域が形成されている。これら集落からは、奈良時代中期を中心とする壇、硯、銅鏡、蛇尾、墨書き土器、屋瓦のほか、斎串や横櫛などの木製品、多量の牛馬骨が出土しており、中央政権による水田や牧経営の管理運営を行った集落であった可能性がある。これらの居住域以外については、大半が水田として利用されていたようで、当該期の集落は長原遺跡西地区や瓜破台地周辺に集中している。

平安時代、八尾南遺跡位置する一帯は「和名類聚抄」によれば、河内国丹比郡に属している。11世紀頃丹比郡は大津道を境に丹北・丹南の2郡に分割され、以後は丹北郡に属している。調査地一帯の条里区画では、丹北郡九条五里二ノ坪にある。この地点より二坪西にあたる七条五里地点から出土した治暦二年(1066)銘のある木簡には「長原里三十五坪」と記されており、当時、坪名呼称が行われていたことが推定される。当該期においては、条里制に基づく方格地割に規制された集落が長原遺跡、木の本遺跡を中心に出現しているが、開発が活発化するのは平安時代中期以降である。集落としては、木の本遺跡西部の木の本、南木の本地区に鎮座する式内社楠本神社三座のうちの二座を中心とする一帯で、平安時代中期の居住域が検出されている。八尾南遺跡内では、YS82-1次で平安時代後期の居住域が検出されているほか、津堂遺跡では集落内寺院である塔ノ本磨寺がこの時期に成立している。

鎌倉時代においても、水田に関連した溝遺構が検出されている程度である。周辺では、長原遺跡南地区および津堂遺跡で居住域が検出されている。また長原遺跡、津堂遺跡では、集落の回りに大溝を配する集落形態が出現しており集落形態が散村から集村へ変化している。室町時代以降も集落域は長原遺跡西南地区付近に存在しており、当遺跡範囲では水田に関連する遺構のみが検出されている。室町時代中期以降は、長原遺跡においても遺構・遺物が希薄で、以後、一帯は水田地帯に移行していったようである。

参考文献(八尾南・長原遺跡の文献については第1表参照)

- ・近江俊秀・岡田清-- 1989「河内南部における古代末期から中世土器の諸問題－木の本遺跡SW-02出土遺物を中心として－」『八尾市文化財紀要4』八尾市教育委員会文化財室
- ・清水和明 1996「長原里」の木簡』『華火61号』(財)大阪市文化財協会
- ・杉本厚典 2003「八尾南・長原・城山遺跡における集落構成の変化－弥生時代から古墳時代にかけての地域社会の一様相」『大阪歴史博物館 研究紀要第2号』(財)大阪市文化財協会
- ・原田昌則 2008「太田遺跡第1次発掘調査報告書」『(財)八尾市文化財調査研究会報告108』(財)八尾市文化財調査研究会

第3章 調査概要

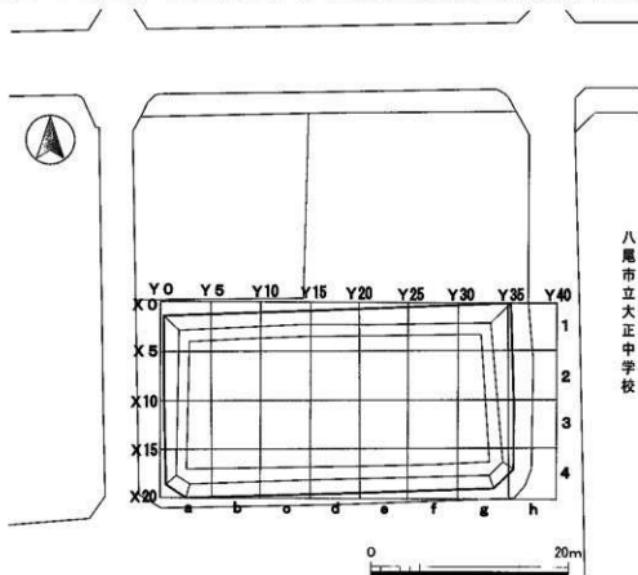
第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、大阪防衛施設局の共同住宅建替え工事に伴うもので、当調査研究会が八尾南遺跡内で行った第18次調査(Y S 92-18)にある。調査地点は、昭和62(1987)年度に当調査研究会が実施した第10次調査(Y S 87-10)の北東約50mに位置している。調査対象範囲は、建物本体の基礎構築工事により遺跡が破壊される範囲である。東西方向に長い長方形の調査地で、上幅で東西35.0m、南北19.0mで、面積は下幅で約400m²を測る。

調査方法については、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約1.7~1.8mまでを重機により掘削した。以下は、層位に従って約0.8mを人力掘削により行い、遺構・遺物の検出に努めた。

調査地の地区割りについては、調査地北西隅を基準点として、調査区全体を5m単位に区割りした。地区名は、北西隅を基点として東西方向がアルファベット(西からa~h)、南北方向が算用数字(北から1~4)とし、1a~4h地区と呼称した。地点の表示については、Y軸(Y 0~Y 35)、X軸(X 0~X 20)の交点の数値で表記した。遺構番号は、遺構略号の後に面番号を付与し3~4桁の遺構番号を合わせて表記する方法を執った。

調査の結果、2面(第1面・第2面)に亘って、古墳時代中期初頭から中期前半(5世紀初頭か



第2図 調査区設定図(S=1/500)

ら前期)に至る遺構・遺物を検出した。また、第3面では古墳時代前期末から中期初頭に比定される遺構を検出した。出土遺物は古墳時代中期初頭から前半を中心とする土師器・韓式系土器・須恵器・土製品・石製品等が出土しており、総量はコンテナで約12箱におよぶ。

第2節 検出遺構と出土遺物

1) 基本層序

本調査地では、盛土層を除いてT.P. +9.00m前後以下の地層を確認した。周辺で実施した既往調査成果では、T.P. +9.70m前後に旧耕作土層の存在が確認されているため、約0.7m程度が削平を受けているものと推定される。現地表下2.6mまでに確認した沖積層上部層を、10層(第0～9層)に区別して基本層序とした。

第0層：盛土。層厚0.80～1.00m。上面の標高はT.P. +9.80m前後である。

第1層：2.5Y8/6黄色極最粒砂～粗粒細砂。水平方向のラミナが認められる洪水起源の堆積層で、上方にかけて粗粒化している。層厚0.18～0.40m。

第2層：N5/0灰色粘土～細粒砂。平安時代の水田作土層である。上部は淘汰が悪い擾拌層で、黒～暗灰色のシルト～細粒砂と炭化物の薄層が水平方向に堆積している。上面に畦畔、足跡が認められる。層厚0.13～0.33m。

第3層：5BG5/1青灰色細粒砂混粘土～細砂。淘汰が悪い層相で、下部に行くに従って極細粒～細粒砂の含有を増す。層厚0.10～0.23m。

第4層：5BG4/1暗青灰色細粒砂混粘土～細砂。淘汰が悪い層相で、下部に行くに従って細粒～粗粒砂の含有を増す。層厚0.07～0.40m。

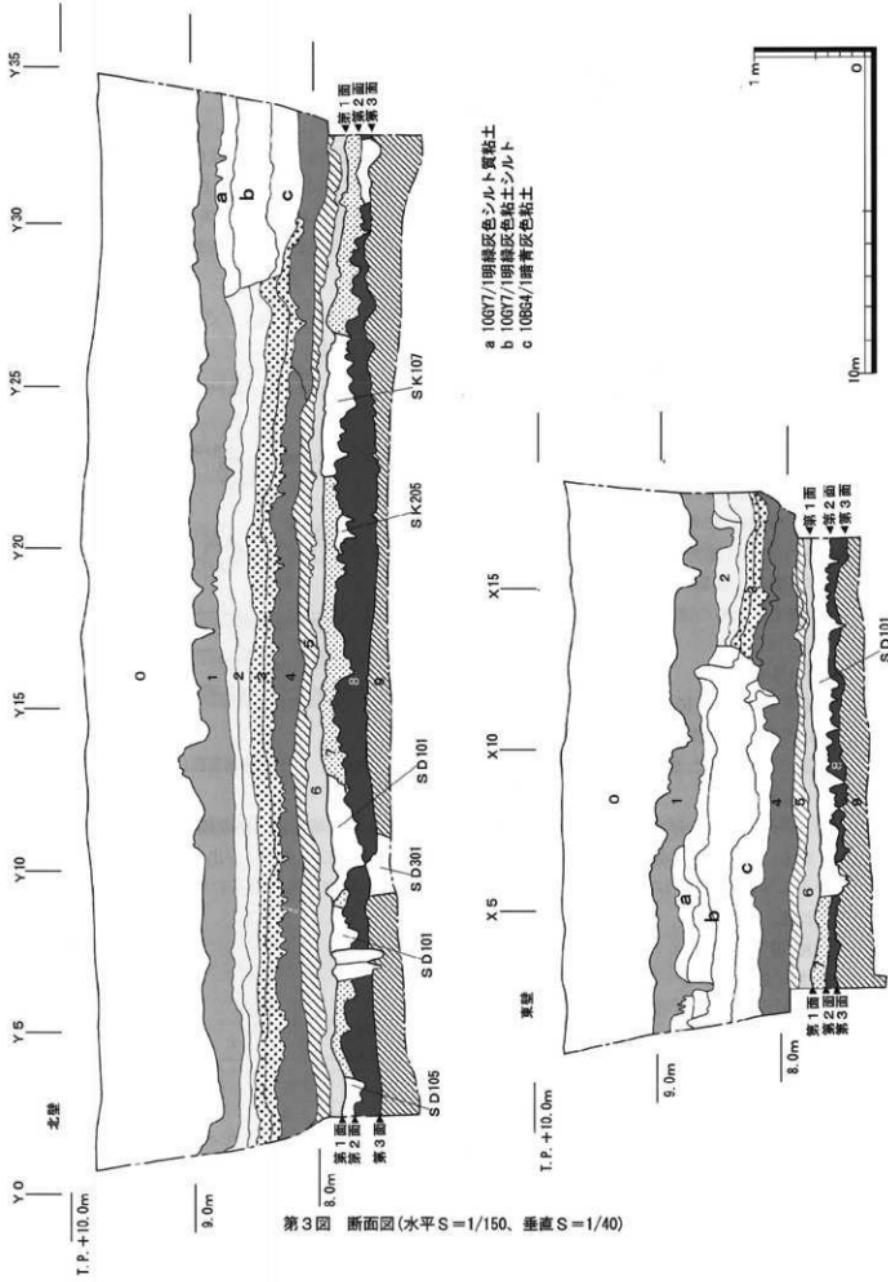
第5層：N4/0灰色粘土。粘性が弱く、酸化鉄が斑点状に沈着している。層厚0.05～0.16m。

第6層：7.5Y4/1灰色粗粒砂混粘土。やや不均質の層相で、上面は土壤化している。層厚0.05～0.17m。古墳時代中期の遺物包含層。

第7層：10BG4/1暗青灰色。シルト～細粒砂が優勢な層相であるが、やや不均質である。酸化鉄の斑点が散見される。層厚0.06～0.25m。上面は第1面であるが、第2面検出の遺構とは時期差が少ないため、整地層の可能性がある。

第8層：10BG6/1青灰色シルト～細粒砂。細粒砂が優勢でしまりの悪い層相である。酸化鉄が斑点状に沈着している。層厚0.05～0.35m。上面は古墳時代中期初頭から前半の遺構構築面(第2面)である。

第9層：5BG5/1青灰色粘土。粘性が強く、滯水状況下での堆積層と考えられる。層厚0.40m以上。上面は第3面。



第3図 断面図(水平S=1/150、垂直S=1/40)

2) 検出遺構と出土遺物

第1面

現地表下約1.9m前後(T.P.+7.8m)に存在する第7層10BG4/1暗青灰色細粒砂層上面で、古墳時代中期前半(5世紀前半)に比定される掘立柱建物を1棟(SB101)、土坑11基(SK101~111)、溝6条(SD101~106)、小穴・柱穴26個(SP101~126)、落込み状遺構1箇所(SO101)を検出した。以下、出土遺物を掲載した遺構を中心に記述し、それ以外は一覧表で詳細を示した。

掘立柱建物(SB)

SB101

調査区北西部の2a b地区で検出した。桁行2間(3.1~3.2m)、梁行2間(2.7~3.0m)の総柱建物である。柱間は、桁行が1.3~1.9m、梁行1.1~1.5mを測る。主軸方位はN35°Wで、床面積約9.0m²を測る。柱穴の掘方形状は円形・楕円形・不定形で不揃いである。埋土はN3/0暗灰色細粒砂混粘土である。建物の西側に並行して伸びるSD103が区画溝、建物の南東部から南に伸びるSD104が排水のための溝であった可能性がある。

土坑(SK)

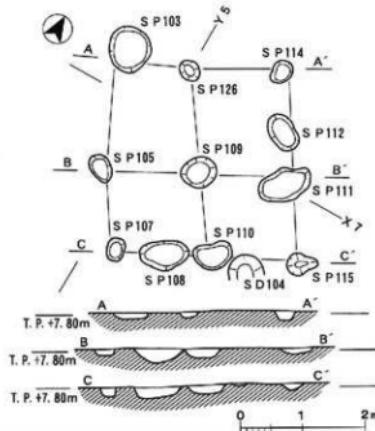
総数で11基(SK101~111)検出した。調査区の全域に分散して検出されているが、特に調査区の北西部で検出されたSB101の周辺に集中する。

SK105

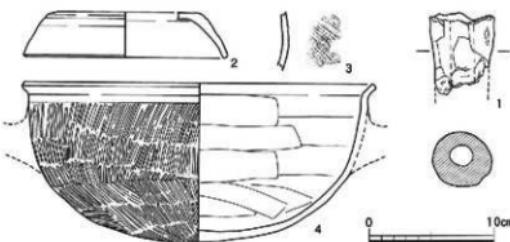
調査区西部の3c区で検出した。不整の楕円形を呈する。東西幅1.2m、南北幅0.94m、深さ0.11mを測る。埋土はN3/0暗灰色細粒砂混粘土である。遺物は縁羽口1点(1)が出土している。1はやや小ぶりの直線羽口片で元口部分を欠く。通風孔は径1.7cmで、先端部分に溶解した部分が認められる。

SK107

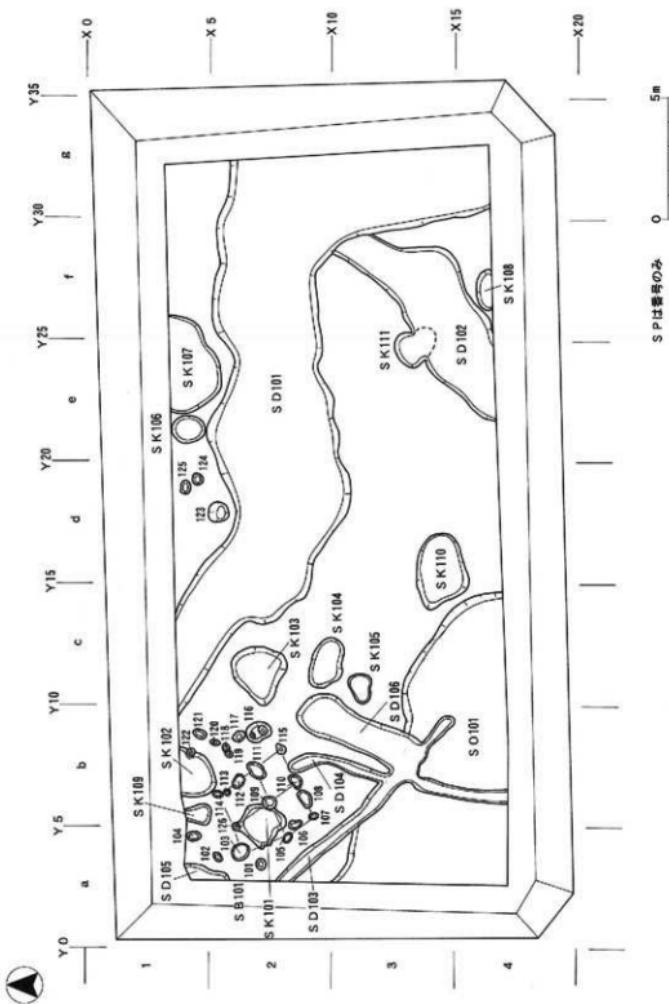
調査区北東部の1・2e、1f地区で検出した。北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で、東西幅3.97m、南北幅2.09m、深さ0.35mを測る。底部に2箇所小穴が存在している。埋土はN3/0暗灰色細粒砂混粘土である。遺物は土師器の細片が



第4図 SB101平面図(S=1/80)



第5図 SK105(1)、SK107(2・3)、SK111(4)出土遺物実測図

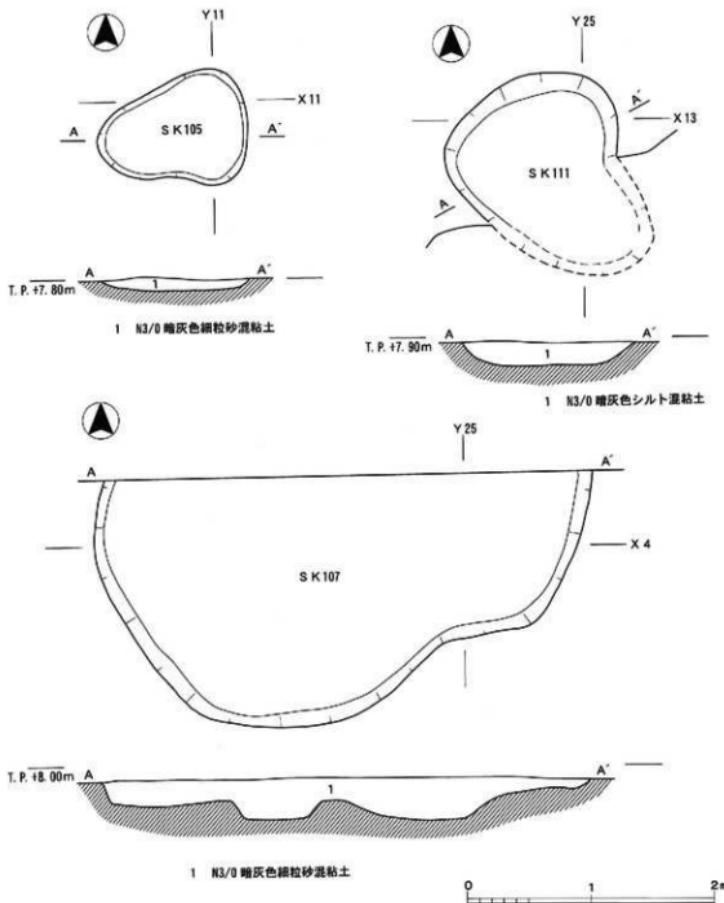


第6図 第1面平面図 ($S=1/200$)

極少量出土している。2点(2・3)を図化した。2は土師器蓋と推定される。3は器種が限定できないが、体部外面に格子タタキを施す瓦質焼成の土器片である。

SK111

調査区南東部の3ef地区で検出した。SD102の北肩を切っている。楕円形で、長径1.83m、短径1.20m、深さ0.21mを測る。埋土はN3/0暗灰色シルト混粘土である。遺物は土師器、韓式系土器が極少量出土している。韓式系土器鍋1点(4)を図化した。4は丸味のある底部を持つ大形鍋である。把手を欠く。口径28.9cm、器高13.0cmを測る。外面の体部から底部に平行タタキが行われている。色調は淡褐色である。胎土中に0.5mm大の長石・チャートを多く含む。



第7図 SK105、SK107、SK111平面面図(S=1/40)

第2表 第1面 土坑(S K101~104・106・108~110)法量表(単位m)

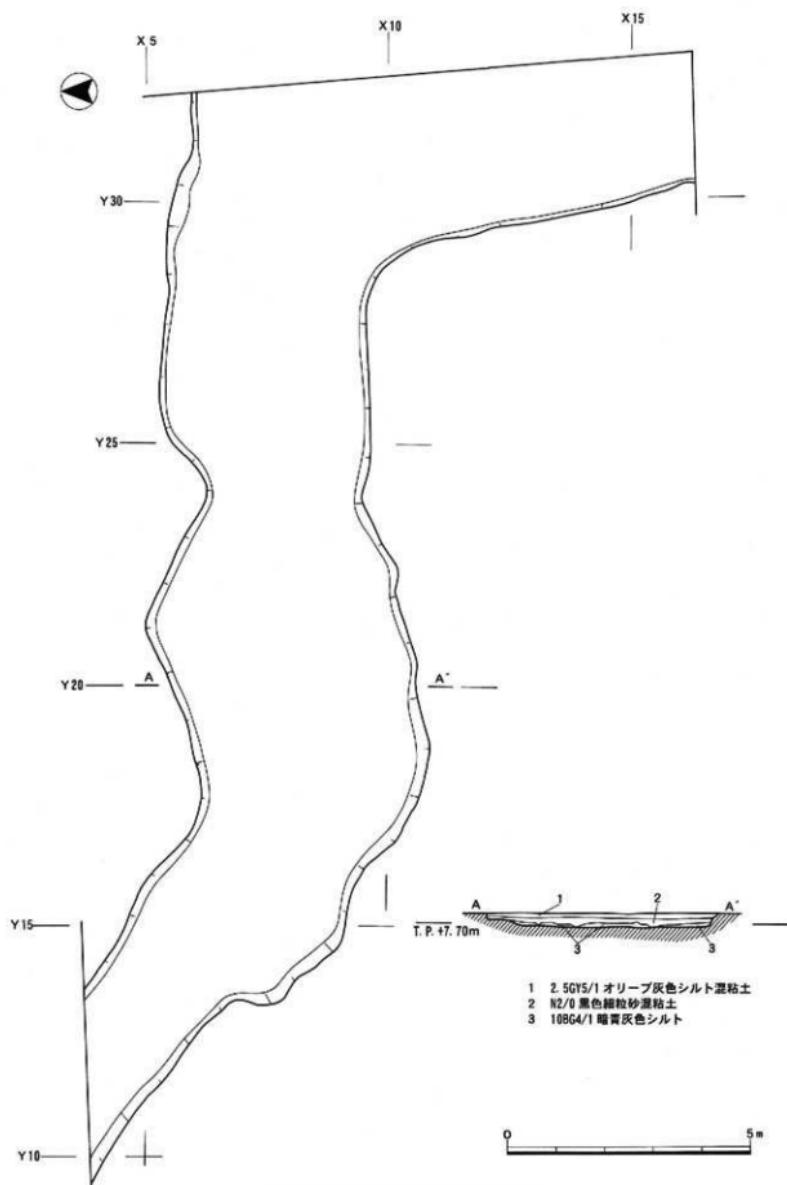
遺構名	地 区	平面形	東西幅	南北幅	深さ	埋 土	出土遺物
S K101	2 a b	不整形	1.88	2.18	0.39	灰色粗粒砂混粘土 暗灰色粗粒砂混粘土	土師器・韓式系土器・須恵器
S K102	1・2 b	不定形	1.98	1.3	0.16	暗灰色粗粒砂混粘土	土師器
S K103	2 c	△	2.47	2.24	0.28	7.5Y4/1灰色粗粒砂混粘土 7.5Y8/3淡黄色シルト混粘土	土師器・韓式系土器
S K104	2・3 c	△	1.9	1.33	0.12	N3/0暗灰色細粒砂混粘土	土師器
S K106	1 e	円形	1.2	1.16	0.18	N3/0暗灰色細粒砂混粘土	土師器
S K108	4 f	不整形	1.65	0.68	0.14	△	
S K109	1・2 b	△	0.91	0.92	0.21	暗灰色シルト混粘土	土師器
S K110	3・4 c d	不定形	2.53	2.41	0.18	N3/0暗灰色細粒砂混粘土	土師器

溝(S D)

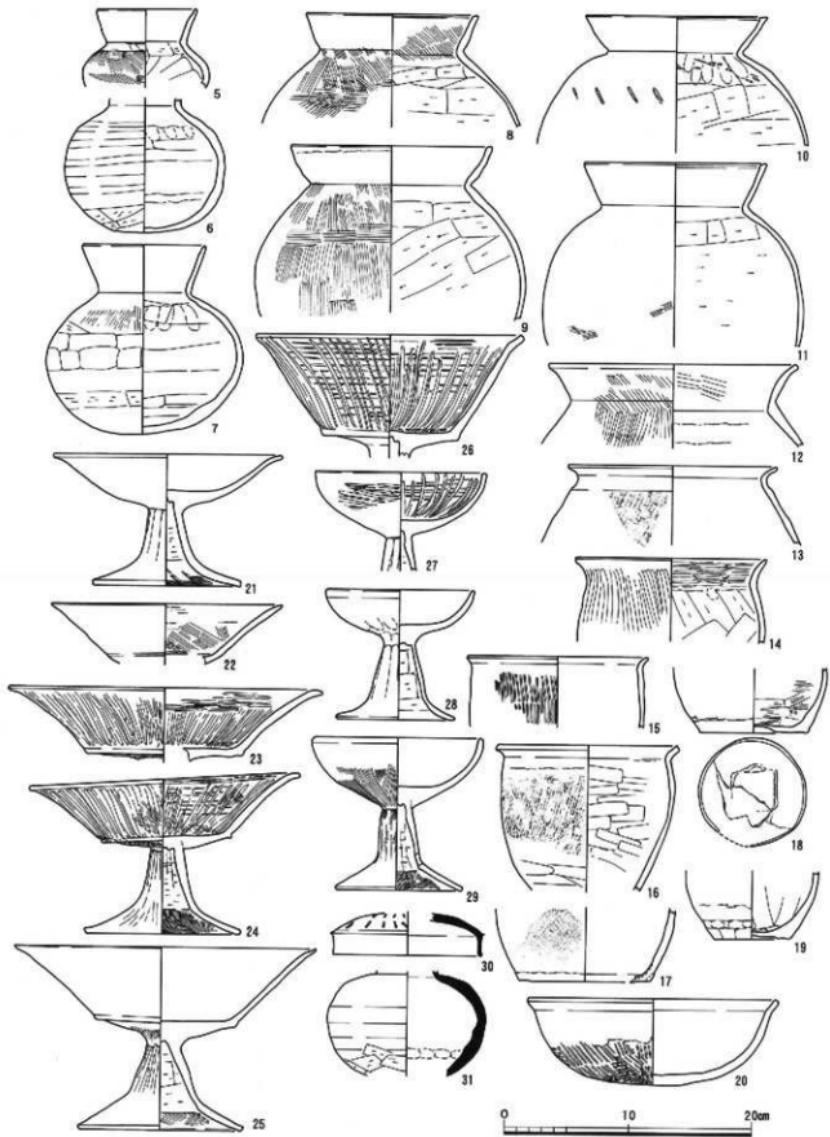
総数で6条(S D101~106)を検出した。規模の大きいS D101・102を除けば、小規模なものが大半を占めている。特に、小規模なものは調査区北西部のS B101の周辺に集中しており、建物のX画や排水等に関わる性格が想定される。

S D101

調査地の北西部の1 b c Xから南東部の2~4 g Xにかけて蛇行して伸びるもので、東端付近で流路を南北方向に変えている。東部でS D102を切る。検出部分で、長さ5.9m、幅2.3~5.2m、深さ0.4mを測る。埋土は上層が2.5Gy5/1オリーブ灰色シルト混粘土、下層がN2/0黒色細粒砂混粘土である。出土遺物としては、土師器、韓式系土器、製塗土器、須恵器があり、特に溝の東端付近に土器類が集中する部分が認められた。遺物の総量はコンテナ1箱程度であるが、土師器、韓式系土器類の細片が大半を占めており、須恵器類は微量である。27点(5~31)図化した。5は土師器小形壺である。粗製品で、体部外面はハケ調整が施されている。6・7は小形の土師器直口壺である。8~13は土師器壺である。8~11は布留系の壺である。10の体部外面上位には、ヘラ状工具による刺突痕が4箇所に残る。12は土師器長胴壺。13は短く外反する口縁部を持つ韓式系土器壺で、体部外面に格子タタキが施されている。14が土師器小形壺。体部から口縁部外面に縱方向のハケが施されている。15~19は韓式系の小形鉢である。体部外面のタタキ文様は、15が平行タタキ、16が繩藤文タタキ、17が格子タタキである。18の裏面には方形のゲタ印が残る。20は半球形の体部に小さく外反する口縁部が付く小形鉢である。口径20.5cm、器高7.0cmを測る。体部外面に平行タタキが施されている。21~29は土師器高杯である。21は杯部が半球形を呈するもので、口縁部付近で小さく外反している。22~26は有稜高杯である。22が小形品で、復元口径18.8cmを測る。23~25は杯口縁部が斜上方に直線的に大きく伸びる大形高杯で、口径22.2~25.7cm、器高13.4~15.1cm、杯体部高5.9~7.6cmを測る。23・24の杯部外面には縱方向の密なヘラミガキが施されている。25は23・24に比して杯部が深い。26は口径に比して杯部が深い大形高杯で、口径21.9cm、杯部高9.0cmを測る。杯部外面に横方向のヘラミガキの後、縱方向のヘラミガキが施されている。27~29は楕円形の杯部を持つ小形の高杯である。30は須恵器杯蓋で、つまみを欠く。天井部に刺突痕が二段環状に施されている。田辯編年のT K73型式のものか。31は須恵器小形壺または瓦泉体部の細片である。体部外面下位に静止ヘラケズリが認められる。色調は白灰色から灰色を呈する。遺構の帰属時期は辻編年(辻2002)の3段階(5世紀前半)に比定される。



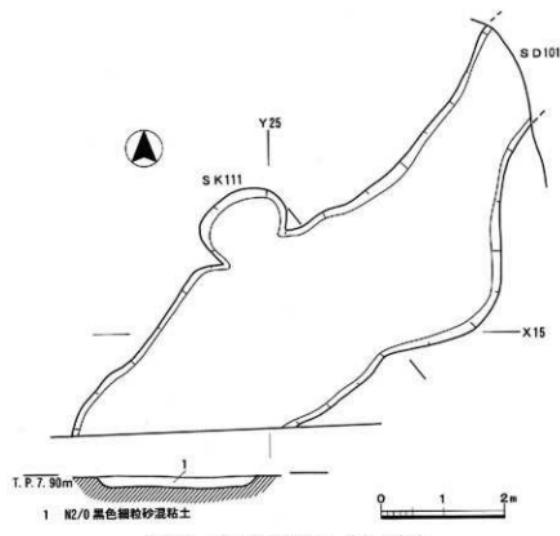
第8図 SD 101断面図 ($S = 1/100$)



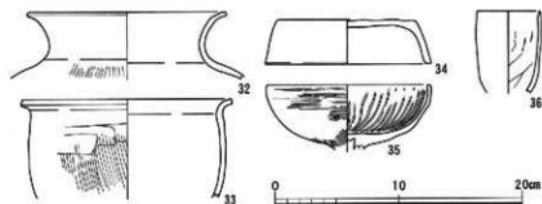
第9図 SD 101出土遺物実測図

SD102

調査区南東部で検出した。南西-北東に伸びるもので、北肩が一部SK111、東端がSD101に切られている。検出部分で長さ28.8m、幅5.4~10.5m、深さ0.28mを測る。埋土はN2/0黒色細粒砂混粘土である。遺物は土師器、韓式系土器、須恵器、製塩土器の細片が少量出土している。5点(32~36)を図化した。32は韓式系土器壺の口縁部から体部上半の細片である。体部外面に平行タタキが施されている。33は平底鉢の細片である。体部外面に平行タタキが施されている。34は土師器蓋である。天井部中央につまみを貼り付けた痕跡がある。全体に丁寧な作りで、口径13.4cm、器高3.6cmを測る。色調は灰黄色。胎土中に5mm以下の長石・チャートが散見される。35は橢形高杯の杯部である。杯部は完存しており、口径13.4cm、杯部高5.0cmを測る。杯部内面に放射状ヘラミガキが施されている。36は裁頭卵形を呈する薄手式の製塩土器片である。広瀬和雄分類(広瀬1994)の丸底I式にあたる。色調は灰白色である。遺構の帰属時期は5世紀前半が推定される。



第10図 SD102断面図 (S=1/80)



第11図 SD102出土遺物実測図

第3表 第1面 溝(SD103~106)法量表(単位m)

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
SD103	2a~3b	4	0.6	0.15	N2/0黒色細粒砂混粘土	土師器
SD104	2·3b	4.2	0.52	0.14	〃	土師器
SD105	1·2a	1.8	0.62	0.15	〃	土師器・須恵器
SD106	2b c~3b	4.31	2.2	0.14	〃	

小穴・柱穴(S P)

S P 101～S P 126

掘立柱建物を構成する柱穴を含めて総数で26個(S P 101～126)を検出した。検出位置は、1・2 d 地区で検出されたS P 123～125を除けば、調査区の北西部に集中している。平面の形状は円形・楕円形・隅丸方形・不定形のものがある。法量は幅0.23～1.07m、深さ0.05～0.27mを測る。そのうち、S P 113・115・120・122・126を除く遺構から遺物が出土しているが、細片のため図化し得たものはない。各小穴・柱穴の法量等の詳細は第4表に示した。

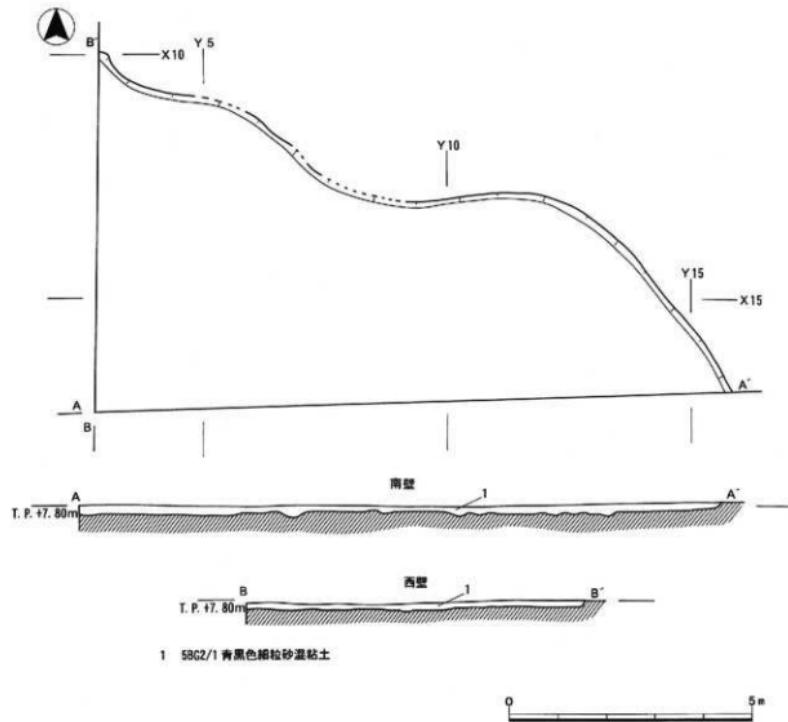
第4表 第1面 小穴・柱穴(S P 101～126) 法量表(単位:m)

遺構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 101	2 a	楕円形	0.42	0.33	0.14	N3/0暗灰色繊粒砂混粘土	土師器・須恵器
S P 102	2	円形	0.52	0.48	0.12	タ	土師器・韓式系土器・須恵器
S P 103	2	タ	0.78	0.67	0.12	タ	土師器
S P 104	1 a	楕円形	0.52	0.41	0.13	タ	土師器・韓式系土器
S P 105	2 a	タ	0.47	0.32	0.11	タ	土師器・韓式系土器
S P 106	2 a b	不定形	0.53	0.32	0.12	タ	土師器
S P 107	2 b	楕円形	0.37	0.28	0.14	タ	土師器
S P 108	タ	タ	0.78	0.49	0.15	タ	土師器・韓式系土器・須恵器
S P 109	タ	円形	0.56	0.5	0.15	タ	土師器
S P 110	タ	不定形	0.62	0.44	0.09	タ	石材
S P 111	タ	タ	0.88	0.56	0.08	タ	土師器
S P 112	タ	楕円形	0.65	0.41	0.05	タ	土師器
S P 113	タ	円形	0.29	0.23	0.06	タ	
S P 114	タ	楕円形	0.41	0.3	0.14	タ	土師器
S P 115	タ	不定形	0.47	0.38	0.09	タ	
S P 116	タ	隅丸方形	1.07	0.86	0.16	タ	土師器・須恵器
S P 117	タ	円形	0.44	0.43	0.17	タ	土師器
S P 118	タ	楕円形	0.42	0.33	0.13	タ	土師器
S P 119	タ	タ	0.38	0.27	0.17	タ	土師器
S P 120	タ	円形	0.43	0.41	0.19	タ	
S P 121	1 b	隅丸方形	0.53	0.37	0.27	タ	土師器
S P 122	タ	円形	0.33	0.31	0.08	タ	
S P 123	2 d	タ	0.85	0.79	0.22	タ	土師器・韓式系土器・須恵器
S P 124	1 d	タ	0.47	0.45	0.15	タ	土師器
S P 125	タ	楕円形	0.63	0.39	0.22	タ	土師器
S P 126	2 a	円形	0.4	0.3	0.27	タ	

落込み状遺構(S O)

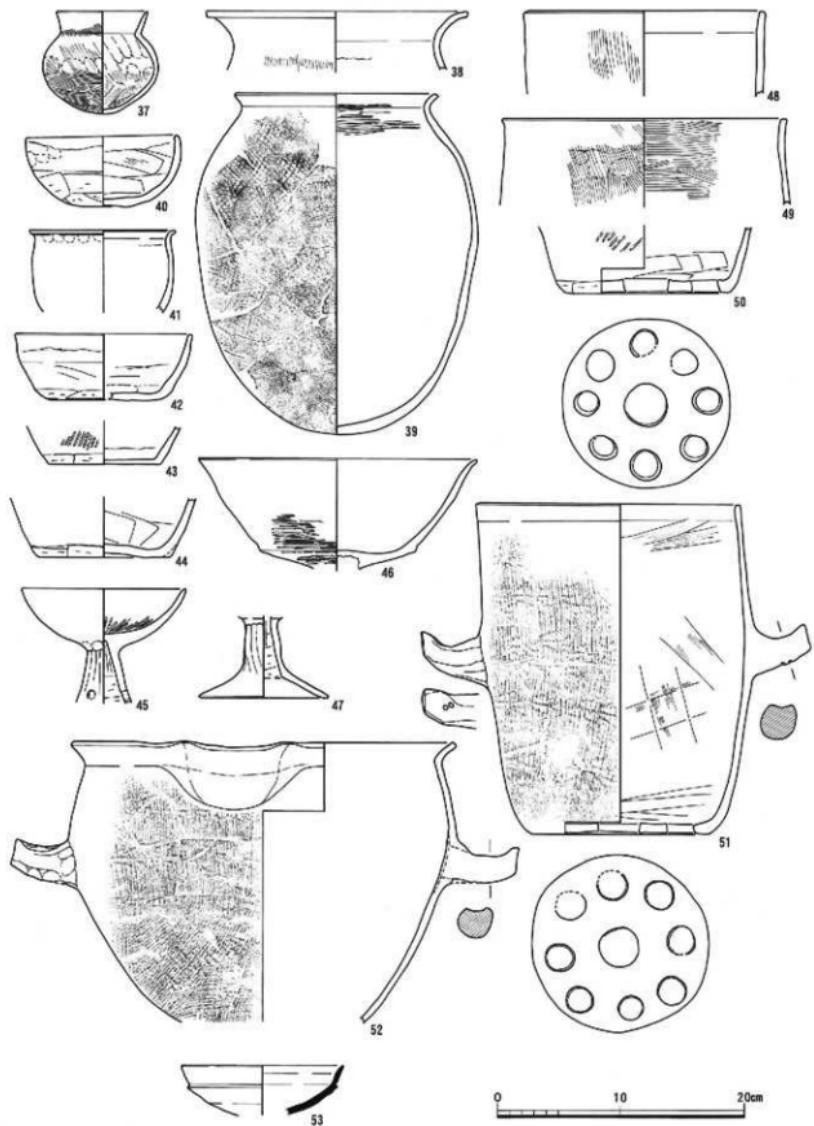
S O 101

調査地南西部で検出した。南部および西部が調査区外に至るもので、北部でS D 103・104・106に切られている。検出部分で東西幅12.0m、南北幅7.0m、深さ0.26mを測る。底部はほぼ平坦であるが、溝状や小穴状の凹みが散見される。内部の堆積土は5BG2/1青黒色粗粒砂混粘土である。出土遺物は土師器、韓式系土器、須恵器等の細片がコンテナ1箱程度出土している。出土遺物の内訳は、土師器、韓式系土器が大半で須恵器は微量である。17点(37～53)を図化した。37は土師器小形壺。完形品で口径7.4cm、器高8.4cm、体部最大径9.4cmを測る。38・39は韓式系土器甕で



第12図 S O 101平面面図 (S = 1/100)

ある。38は口縁部付近の細片である。体部外面に平行タタキを施す。39は長胴形の体部に小さく外反する口縁部が付く甕である。体部外面に格子タタキを施す。40~42は土師器鉢である。40は半球形の体部を持つ小形鉢。41は小さく外反する口縁部を持つ小形鉢。42は浅めの体部を有する小形鉢。完形品で口径14.5cm、器高5.4cm、底径4.4cmを測る。T G 232型式にみられる百済系の初期須恵器を模倣したものと考えられる。43・44は韓式系土器の小形鉢。43の体部外面に平行タタキを施す。43・44共に底部外側面にはヘラケズリが施されている。45は楕形の体部を持つ楕形高杯。46は大形の有棱高杯の杯部である。口径22.7cm、杯部高9.0cmを測る。47は脚部である。48~51は直口の口縁部を有する甕である。48・49が口縁部の細片で、体部外面の調整は共にタテハケである。50は体部下半から底部が完存している。体部外面に平行タタキを施す。裏面の蒸気孔は円形で、中央部に1個、その周りに8個が配されている。51は体部外面に鳥足文タタキを施す韓式系土器の甕である。寸胴状を呈する体部中位の左右に把手が貼り付けられている。図上で完形に復元可能で、口径21.6cm、器高27.1cm、把手部分を含めた最大幅31.5cm、底部径14.5cmを測る。裏面の蒸気孔は50と同様、中央部に1個(径3.0cm)、その周りに8個(径2.0cm)が配されている。



第13図 S O 101出土遺物実測図

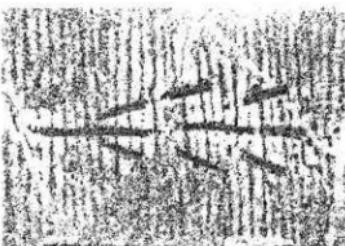
把手は両側に平坦な端面を持つ牛角状で、平面はナデ調整で把手の上面は浅く溝状に抉られ、両方ともに下側面には竹管文状の凹みが2個みられる。体部と底部の接合においては補足粘土を用いて圧着した後、横方向にケズリとナデを行いて平滑に整形されているが、やや雑で不完全な部分が多い。体部外面の器面調整は、口縁部がヨコナデ、体部上半から下半に鳥足文タタキ、体部下半にナデが行われている。鳥足文タタキメは、把手下部付近に水平方向に描かれた直線文を境として上部に3条、下部に2条の計5条が確認できる。タタキメは右開きで、基本的には向って左から右方向に横方向に連続し、その成形作業を上段から下段に向って行っている。鳥足文タタキの原体は、僅かに左に傾く平行線の彫込みに、横線の1点を基点として上下に斜線を持つ鳥足状に彫られた文様が直行している。鳥足文タタキの原体文様としては、田中清美氏分類(田中1994)の、中心軸の先端が集束せず角度が大きいC類に分類されるもので、鳥足文タタキ原体の法量は長さ3cm、幅1.8cm程度である。焼成は良好で色調は淡赤橙色である。

52は韓式系土器の鍋である。底部以外はほぼ完存している。「く」の字状に屈曲し流口を有する口縁部を持つ鍋で、体部の中位に左右一対の牛角状把手が付く。口径31.4cm、残存高23.0cm、把手部分を含めた最大幅41.4cmを測る。体部外面の鳥足文タタキは、体部下半を境に、上部では横方向、下部では左斜方向に行われている。上部では、把手下位部分より上部に3条、下位では部分的に行われている。鳥足文タタキの原体は51と同じものが使用されている。タタキの回数は、把手部分の上部付近で一周38回程度が行われている。内面が黒色を呈する以外は、焼成や色調は51に類似しており、同一工人による可能性がある。

なお、51・52の類例としては、調査地北西約400mで行われた長原遺跡のN G95-36次調査の長原7B層層準から出土した資料(櫻井1998)がある。形状や法量、鳥足文タタキの施文方法の類似性や52のように内面全体が黒色を呈する点においても共通点を持つもので、同一製作集団あるいは同一工人の製作である可能性が高い。一方、N G95-36次調査出土の韓式系土器については、辻美紀氏が示された古墳時代中期編年(辻2002)の中で、2段階新相に比定されており、初期須恵器では大庭寺遺跡のT G232型式(藤田ほか1995)との併行関係が示されている。53は須恵器無蓋高杯の杯部である。復元口径13.0cmを測る。田辺編年(田辺1966)のT K73型式(5世紀前半)前後のものと推定される。遺構の帰属時期については、5世紀前半が推定される。



51



52

第14図 鳥足文タタキメ拓影(S=1/1)

第2面

第1面から0.1~0.2m下層(T.P.+7.6~7.7m)に存在する第8層10BG6/1青灰色細粒砂・シルト層上面で、古墳時代中期初頭から前半(5世紀初頭から前半)に比定される掘立柱建物6棟(SB201~206)、土坑9基(SK201~209)、溝16条(SD201~216)、小穴・柱穴118個(SP201~2118)を検出した。第2面として捉えたが、第1面とは時期差が少ないものと考えられる。以下、主要遺構および出土遺物を掲載した遺構を中心に記述し、それ以外は一覧表で示した。

掘立柱建物(SB)

調査区中央部以西で掘立柱建物6棟(SB201～206)を検出した。中央より西には重複して3棟の掘立柱建物(SB201～SB203)と、これより西に1棟(SB204)、北東に1棟(SB205)、南東に1棟(SB206)を検出した。

S B 201

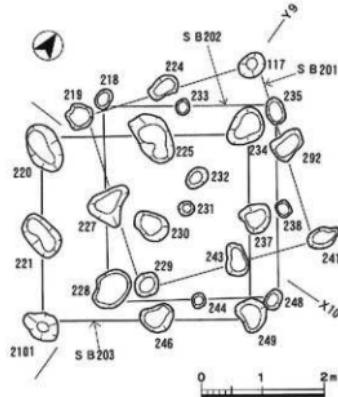
調査区西部の2・3b地区で検出した。SB202・203が重複している。総柱建物で桁行2間(3.0m)、梁行2間(3.0m)の規模を測る。柱間は、桁行が1.5m、梁行1.5mを測る。主軸方位はN56°Wで、床面積は約9.0mfを測る。柱穴の掘方形状は円形・楕円形・不定形で規模は径0.37~0.70m、深さ0.09~0.27mを測る。主軸を同じくするSB204・205が同時期に併存した遺構の可能性がある。

S B 202

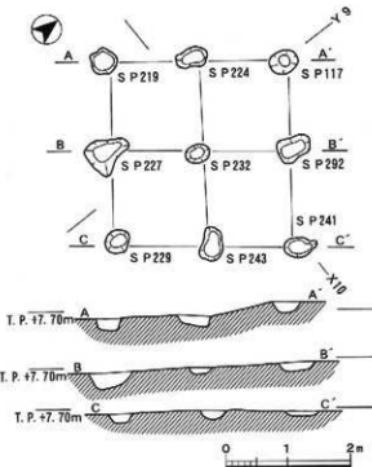
S B201・203と重複している。柱間建物で桁行2間(3.1m)、梁行2間(2.7~2.8m)の規模を測る。柱間は、桁行が1.5~1.6m、梁行1.2~1.5mを測る。主軸方位はN40°Wで、床面積は約8.5m²を測る。柱穴の掘方形状は円形・楕円形・不定形で規模は径0.32~0.65m、深さ0.09~0.29mを測る。主軸を同じくするS B206が同時期に併存した可能性がある。

S B 203

S B202のやや西側にずれて重複している。総柱建物で桁行2間(3.0~3.1m)、梁行2間(3.4m)の規模を測る。柱間は、桁行が1.5m、梁行1.6~1.8mを測る。主軸方位はN44°Wで、床面積は約10nfを測る。柱穴の掘方形形状は円

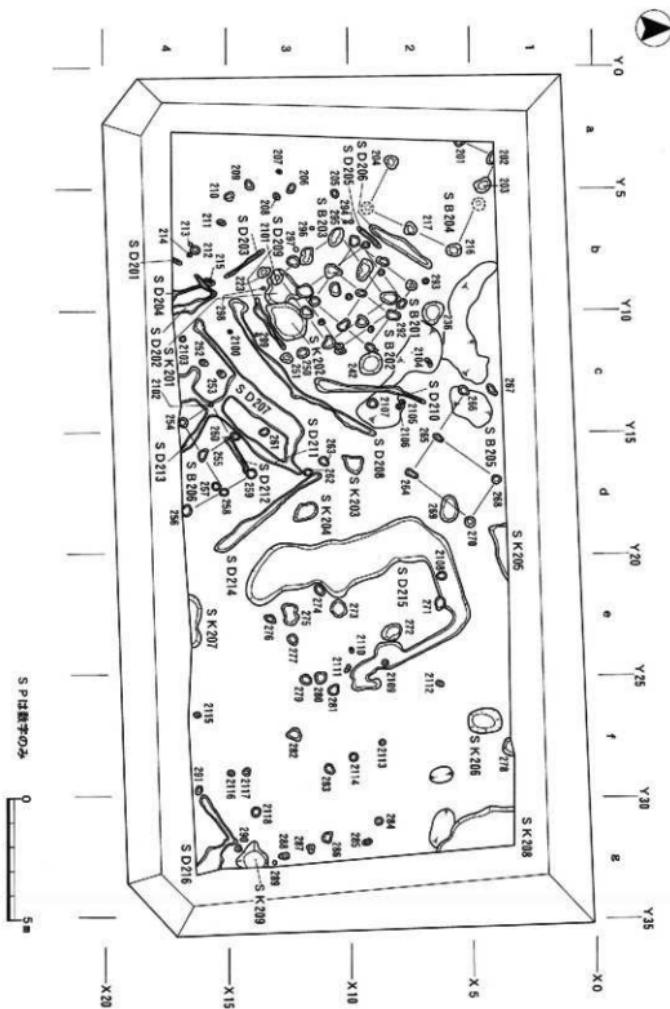


第15図 SB201~203平面図(S=1/80)

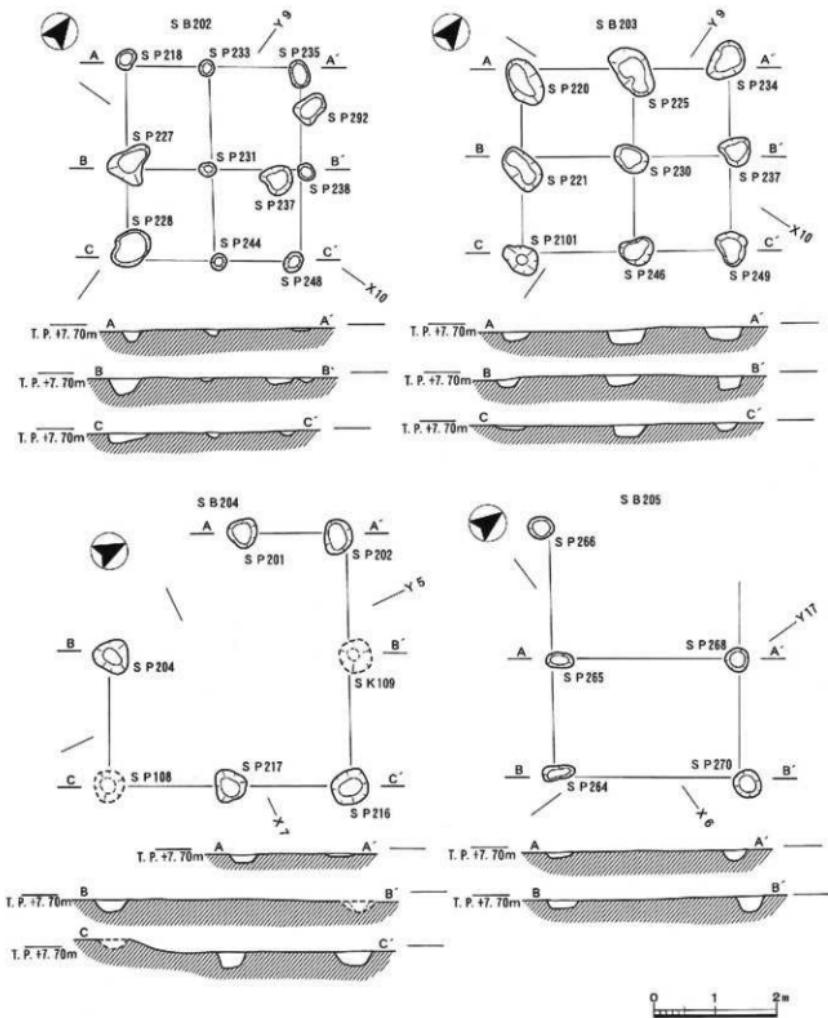


第16図 SB201断面図 ($S=1/80$)

図17 案2断面図 (S=1/200)



形・楕円形で、規模は径0.35~0.62m、深さ0.07~0.28mを測る。主軸を同じくするSB206が同時期に併存した可能性がある。



第18図 SB202~205平面面図 (S=1/80)

S B 204

調査区北西部の1・2a・b地区で検出した。北西端が調査区外に至るため全容は不明であるが、桁行2間(4.1m)、梁行2間(4.0m)の規模を測る。柱間は、桁行が2.0~2.1m、梁行2.0mを測る。主軸方位はN62°Wで、床面積は約16.4m²を測る。柱穴の掘方形状は円形で径0.46~0.68m、深さ0.04~0.31mを測る。主軸方向の数値が近似値であるS B 201・205が同時期に併存した可能性がある。

S B 205

調査区中北部の1・2c・d地区で検出した。北西端が調査区外に至るため全容は不明であるが、桁行2間以上(4.0m)、梁行1間(3.1m)の規模を測る。柱間は、桁行1.9~2.1m、梁行3.1mを測る。主軸方位はN70°Wである。柱穴の掘方形状は円形および不定形で径0.35~0.50m、深さ0.12~0.29mを測る。主軸を同じくするS B 201・204が同時期に併存した可能性がある。

S B 206

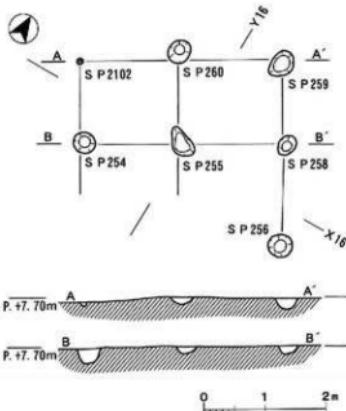
調査区中南部の3・4c・d地区で検出した。南部が調査区外に至るため全容は不明であるが、東柱があるため総柱建物であったと推定される。検出部分で桁行2間以上(3.0m)、梁行1間(3.3m)の規模を測る。柱間は、桁行が1.3~1.6m、梁行1.6~1.7mを測る。主軸方位はN33°Wである。柱穴の掘方形状は円形および梢円形で径0.10~0.40m、深さ0.10~0.29mを測る。主軸を同じくするS B 202・203が同時期に併存した可能性がある。

土坑(S K)

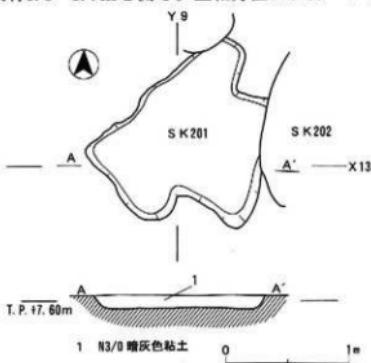
総数で9基(S K 201~209)を検出した。調査区全域で分散して検出されている。調査地北東隅で検出されたS K 208からは、滑石製勾玉・白玉が出土しており、祭祀的な様相が推定されるがそれ以外の土坑については、掘立柱建物の周辺に分布している。

S K 201

調査区西部の3b地区で検出した。S K 202、S P 228に一部切られている。不定形で、東西幅1.42m、南北幅1.56mを測る。底部はほぼ水平で深さ0.1mを測る。埋土はN3/0暗灰色粘土



第19図 S B 206平断面図(S=1/80)



第20図 S K 201平断面図(S=1/40)

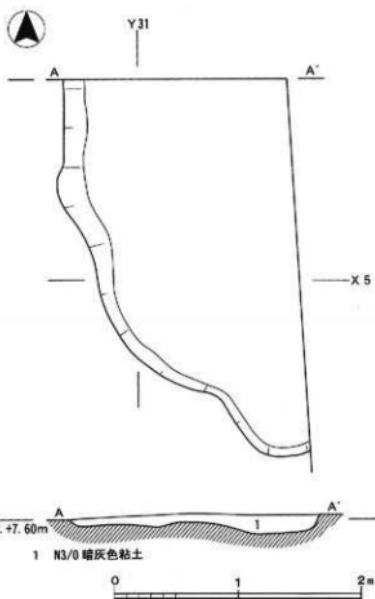


第21図 S K 201出土物実測図

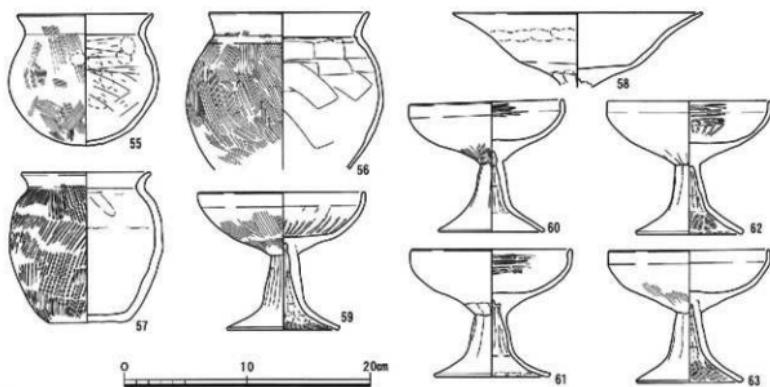
である。遺物は土師器の細片が極少量出土している。1点(54)を図化した。土師器小形鉢の底部である。体部外面にハケ調整、底部側面にヘラケズリが施されている。

S K 208

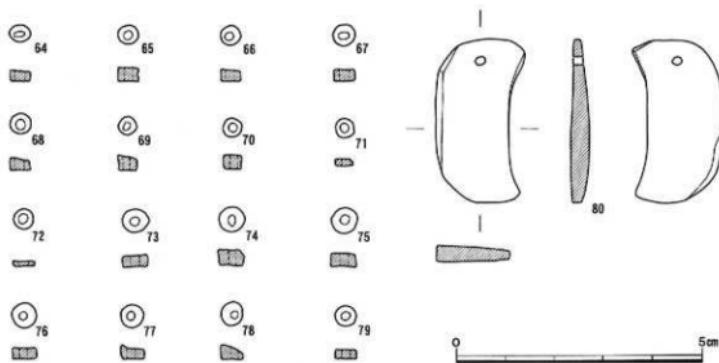
調査区北東隅の1・2g地区で検出した。北部および東部が調査区外のため全容は不明である。検出部分で、東西幅1.9m、南北幅3.12m、深さ0.18mを測る。内部の堆積土はN3/0暗灰色粘土である。遺物は土師器、韓式系土器等の土器類の他、石製品(勾玉・白玉)が出土している。26点(55~80)を図化した。土器類は9点(55~63)を図化した。55・56は土師器壺である。55は小形品で口径11.2cm、器高10.8cm、体部最大径12.3cmを測る。体部外面にハケ調整を施す。56は中形品で底部を欠く。体部外面のハケ調整は左上がりに施されている。57は土師器平底鉢である。体部に丸味を持つもので、口縁部は小さく外反する。口径10.6cm、器高12.3cm、体部最大径12.6cmを測る。体部外面には、ハケ調整が施されている。58~63は土師器高杯である。58は有稜高杯である。脚部を欠く。59~63は楕円高杯である。完形品ないしは図上で完形に復元可能である。口径12.6~13.6cm、器高10.3~11.3cm、裾部径8.3~9.3cmを測る。色調は赤褐色系である。胎土には5mm以下の長石が散見される。石製品は17点(64~80)を図化した。64~79は白玉、80が勾玉である。80の勾玉は、土師器小形壺(55)の中から出土し、



第22図 SK 208平面断面図 (S=1/40)



第23図 SK 208出土遺物実測図-1



第24図 S K 208出土遺物実測図—2

第5表 玉類法量表(cm)

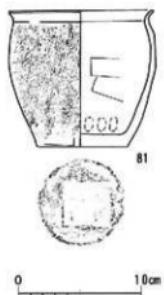
番号	製品名	法量			石材
		幅	厚さ	孔径	
64	臼玉	0.42	0.22	0.20	滑石
65	ク	0.42	0.27	0.20	ク
66	ク	0.42	0.25	0.17	ク
67	ク	0.45	0.22	0.22	ク
68	ク	0.43	0.25	0.21	ク
69	ク	0.35	0.32	0.13	ク
70	ク	0.37	0.30	0.17	ク
71	ク	0.37	0.15	0.18	ク
72	ク	0.40	0.10	0.19	ク

番号	製品名	法量			石材
		幅	厚さ	孔径	
73	白玉	0.55	0.25	0.18	滑石
74	ク	0.57	0.35	0.14	ク
75	ク	0.55	0.30	0.18	ク
76	ク	0.52	0.25	0.16	ク
77	ク	0.50	0.30	0.16	ク
78	ク	0.50	0.30	0.17	ク
79	ク	0.45	0.20	0.14	ク
80	勾玉	3.35	0.35	0.17	ク

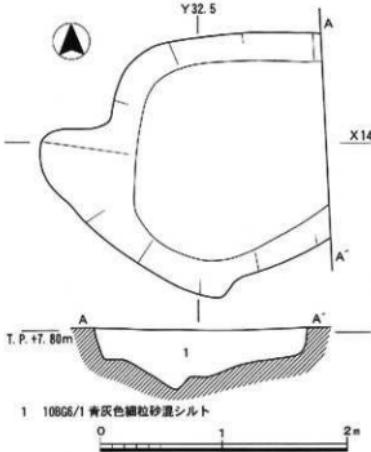
白玉類はその周囲から出土した。石材はすべて滑石製である。法量等は第5表に示した。遺構の帰属時期は辻編年の3段階(5世紀前半)に比定される。

S K 209

調査区南東部の3g地区で検出した。東端は調査区外に至る。検出部分で東西幅2.32m、南北幅2.12mを測る。埋土は10BG6/1青灰色細粒砂混シルトである。遺物は韓式系土器1点(81)が出土している。81は韓式系土器の平底鉢の完形品である。口径11.6cm、器高11.3



第25図 S K 209出土
遺物実測図



第26図 S K 209断面図 (S=1/40)

cm、体部最大径11.9cm、底径7.3cmを測る。体部外面の器面調整は繩縫文タタキで、体部外面と底部側面の接合部分に補足粘土を削り取ったヘラケズリの痕跡が認められる。底部裏面に4cm四方のゲタ印の圧痕が認められる。遺構の帰属時期は占墳時代中期前半が推定される。

第6表 第2面 土坑(S K202~206)法量表(単位m)

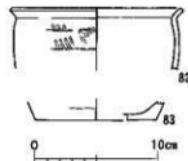
遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S K202	3 b c	不定形	1.42	1.76	0.08	N1.5/0黒色細粒砂混粘土	土師器
S K203	2・3 d	△	0.87	0.90	0.10	N3/0暗灰色粘土	土師器
S K204	3 d	楕円形	0.64	0.81	0.12	S84/1暗青灰色シルト混粘土	土師器
S K205	1 d c	不規形	2.45	0.80	0.09	N4/0灰色シルト混粘土	
S K206	1・2 f	楕円形	0.99	1.23	0.14	N1.5/0黒色粘土	土師器
S K207	4 e	不明	2.00	0.54	0.19	S5G2/1黒色細粒砂混粘土	

溝(S D)

総数で16条(S D201~216)を検出した。「コ」の字状に広がるS D215を除けば、小規模で直線的に伸びるもののが大半を占める。掘立柱建物群を構成する調査区中央部以西に集中しており、掘立柱建物の建物を区画する小溝の役割を果たしたものと推定される。そのうち、遺物が出土したものはS P206~208・214・216で、図化したS D208出土遺物以外は細片が大半を占めている。各溝の法量等の詳細は第7表に示した。

S D208出土遺物

土師器、韓式系土器の細片が少量出土している。2点(82・83)を図化した。2点共に韓式系土器平底鉢である。82は口縁部から体部の細片である。屈折する口縁部を持つもので復元口径14.0cmを測る。体部外面に平行タタキが施されている。83は底部の細片である。復元底径9.8cmを測る。



第27図 S D208出土遺物

第7表 第2面 溝(S D201~216)法量表(単位m)

遺構名	地区	全長 (横出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D201	4 b	0.44	0.13	0.06	M1/0灰色細粒砂	
S D202	4 b c	2.86	0.51	0.05	N2/0黒色細粒砂	
S D203	3 b	1.97	0.19	0.04	△	
S D204	4 b	1.74	0.32	0.05	△	
S D205	2 b	1.28	0.27	0.03	△	
S D206	△	3.00	0.44	0.07	△	土師器
S D207	3 d ~ 4 c	4.80	0.90	0.12	-	土師器・韓式系土器
S D208	2 c ~ 3 b	6.70	0.41	0.03	-	土師器・韓式系土器
S D209	3 b c	2.35	0.31	0.05	-	
S D210	2・3 c	4.34	0.45	0.05	-	
S D211	3 d ~ 4 c	6.46	0.39	0.05	-	
S D212	3・4 d	1.67	0.30	0.08	-	
S D213	4 c d	3.20	0.49	0.15	-	
S D214	3・4 d	5.38	0.51	0.09	-	土師器
S D215	2・3 d ~ f	14.94	2.30	1.15	N4/0灰色細粒砂	
S D216	3・4 f g	3.96	0.92	0.09	N3/0暗灰色シルト混粘土	土師器

小穴・柱穴(S P)

掘立柱建物を構成する柱穴を含めて、総数で118個(S P 201~2118)を検出した。全域に分布しているが、掘立柱建物が重複する西部付近の密集度が特に高い。平面の形状では、円形・不整円形・楕円形・隅丸方形・不定形がある。規模は0.08~1.03m、深さは0.03~0.33mを測る。そのうち、出土遺物を掲載した小穴・柱穴については、平面面を掲載したが、それ以外については、第8表の法量表に詳細を示した。

第8表 第2面 小穴・柱穴(S P 201~2118)法量表(単位m)

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
S P 201	2 a	不定形	0.48	0.38	0.13	N3/0暗灰色細粒砂混粘土	
S P 202	1 a	タ	0.56	0.35	0.05	タ	
S P 203	1 a b	楕円形	0.71	0.62	0.06	タ	
S P 204	2 a	円形	0.57	0.56	0.21	タ	
S P 205	3 b	タ	0.31	0.29	0.05	タ	土師器
S P 206	3 a b	隅丸方形	0.45	0.31	0.11	タ	
S P 207	3 a	円形	0.21	0.21	0.07	タ	
S P 208	3 b	タ	0.24	0.23	0.07	タ	土師器
S P 209	3 a	隅丸方形	0.45	0.33	0.08	タ	
S P 210	3・4 b	タ	0.35	0.28	0.11	タ	
S P 211	4 b	円形	0.33	0.28	0.12	タ	
S P 212	タ	タ	0.38	0.33	0.06	タ	土師器
S P 213	タ	タ	0.17	0.16	0.04	タ	
S P 214	タ	タ	0.22	0.18	0.04	タ	
S P 215	タ	楕円形	0.22	0.16	0.10	タ	
S P 216	2 b	円形	0.61	0.53	0.25	タ	土師器
S P 217	タ	不定形	0.55	0.49	0.28	タ	土師器・傳式系土器
S P 218	タ	楕円形	0.33	0.24	0.18	タ	
S P 219	タ	不定形	0.40	0.40	0.18	タ	
S P 220	3 b	タ	0.89	0.53	0.23	タ	土師器
S P 221	タ	隅丸方形	0.75	0.44	0.21	タ	土師器
S P 222	タ	不定形	0.68	0.39	0.10	タ	土師器
S P 223	タ	タ	0.54	0.46	0.08	タ	
S P 224	2 b	タ	0.53	0.31	0.18	タ	
S P 225	タ	楕円形	0.89	0.52	0.23	タ	土師器
S P 226	2・3 b	隅丸方形	0.26	0.21	0.11	タ	
S P 227	3 b	不定形	0.69	0.39	0.29	タ	土師器
S P 228	タ	タ	0.64	0.5	0.14	タ	
S P 229	タ	円形	0.43	0.38	0.13	タ	土師器
S P 230	3 b	楕円形	0.59	0.44	0.16	タ	土師器
S P 231	2・3 b	タ	0.29	0.23	0.05	タ	
S P 232	2 b	タ	0.40	0.31	0.12	タ	
S P 233	タ	円形	0.25	0.22	0.11	タ	
S P 234	タ	楕円形	0.69	0.51	0.18	タ	土師器
S P 235	タ	タ	0.43	0.31	0.04	タ	
S P 236	2 b c	不定形	0.85	0.71	0.04	タ	
S P 237	2 c	タ	0.48	0.47	0.22	タ	鐵石
S P 238	タ	円形	0.26	0.22	0.07	タ	

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
S P239	2 c	椭円形	0.19	0.15	0.03	N3/0暗灰色細粒砂混粘土	
S P240	♪	不定形	0.27	0.22	0.04	♪	
S P241	♪	♪	0.50	0.33	0.07	♪	
S P242	♪	円形	0.90	0.76	0.20	♪	土師器・紙石 86・87・90
S P243	3 c	不定形	0.61	0.3	0.13	♪	土師器
S P244	♪	円形	0.23	0.23	0.07	♪	
S P245	3 b c	椭円形	0.67	0.35	0.11	♪	
S P246	♪	不定形	0.53	0.43	0.09	♪	
S P247	3 c	椭円形	0.28	0.23	0.12	♪	
S P248	♪	♪	0.35	0.27	0.07	♪	
S P249	♪	不定形	0.55	0.42	0.17	♪	土師器
S P250	♪	♪	0.47	0.38	0.04	♪	土師器
S P251	♪	円形	0.38	0.37	0.14	♪	土師器・須恵器 84・85・89
S P252	4 c	♪	0.32	0.3	0.08	♪	
S P253	♪	隅丸方形	0.42	0.26	0.11	♪	土師器
S P254	♪	円形	0.37	0.34	0.06	♪	
S P255	4 d	不定形	0.54	0.31	0.13	♪	土師器
S P256	♪	円形	0.38	0.39	0.26	♪	土師器
S P257	♪	♪	0.36	0.36	0.18	♪	石材
S P258	♪	椭円形	0.35	0.38	0.14	♪	
S P259	3 d	♪	0.46	0.35	0.19	♪	
S P260	♪	円形	0.38	0.33	0.10	♪	
S P261	3 c d	不定形	0.34	0.30	0.14	♪	
S P262	3 d	円形	0.38	0.36	0.12	♪	
S P263	♪	不定形	0.38	0.34	0.16	♪	
S P264	2 d	♪	0.53	0.22	0.13	♪	
S P265	♪	隅丸方形	0.42	0.23	0.13	♪	
S P266	2 c	不定形	0.38	0.29	0.24	♪	土師器
S P267	1 c	円形	0.33	0.29	0.15	♪	土師器
S P268	1 d	♪	0.37	0.34	0.20	♪	
S P269	2 d	不定形	1.03	0.72	0.16	♪	須恵器
S P270	1・2 d	円形	0.45	0.42	0.28	♪	
S P271	2 e	不定形	0.53	0.37	0.20	♪	
S P272	♪	♪	0.83	0.55	0.17	♪	
S P273	3 e	♪	0.57	0.41	0.11	♪	
S P274	♪	椭円形	0.42	0.34	0.16	♪	
S P275	♪	不定形	0.83	0.42	0.08	♪	
S P276	♪	椭円形	0.49	0.35	0.11	♪	
S P277	♪	♪	0.40	0.33	0.13	♪	土師器
S P278	1 f	不定形	0.64	0.45	0.13	♪	
S P279	3 f	椭円形	0.41	0.34	0.06	♪	
S P280	3 e f	隅丸方形	0.44	0.36	0.20	♪	
S P281	3 f	椭円形	0.45	0.38	0.33	♪	土師器
S P282	♪	♪	0.58	0.44	0.10	♪	
S P283	♪	♪	0.42	0.32	0.06	♪	
S P284	2 g	♪	0.31	0.22	0.13	♪	
S P285	♪	♪	0.30	0.21	0.11	♪	

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
S P286	3 g	楕円形	0.51	0.34	0.15	N3/0暗灰色細粒砂混粘土	
S P287	タ	タ	0.40	0.22	0.10	タ	
S P288	タ	円形	0.36	0.30	0.13	タ	
S P289	タ	タ	0.18	0.16	0.03	タ	
S P290	タ	不定形	0.20	0.18	0.03	タ	
S P291	4 f	円形	0.34	0.30	0.09	タ	
S P292	2 c	隅丸方形	0.56	0.34	0.17	タ	土師器
S P293	2 b	円形	0.20	0.17	-	タ	柱根
S P294	タ	タ	0.16	0.15	-	タ	柱根
S P295	3 b	タ	0.08	0.08	-	タ	柱根
S P296	タ	タ	0.18	0.16	-	タ	柱根
S P297	タ	タ	0.11	0.10	-	タ	柱根
S P298	タ	楕円形	0.16	0.12	-	タ	柱根
S P299	3 c	円形			-	タ	柱根・土師器
S P2100	タ	なし			-	タ	柱根
S P2101	3 b	円形	0.45	0.45	0.03	タ	
S P2102	4 c	タ	0.14	0.15	0.15	タ	
S P2103	タ	楕円形	0.19	0.17	-	タ	
S P2104	2 c	タ	0.41	0.19	0.09	タ	
S P2105	タ	隅丸方形	0.22	0.17	-	タ	
S P2106	タ	タ	0.18	0.12	0.13	タ	
S P2107	タ	タ	0.36	0.28	0.15	タ	
S P2108	2 e	タ	0.30	0.29	-	タ	
S P2109	タ	円形	0.24	0.24	-	タ	
S P2110	2・3 e	楕円形	0.24	0.20	-	タ	
S P2111	3 e	不定形	0.36	0.21	-	タ	
S P2112	2 f	隅丸方形	0.33	0.22	-	タ	
S P2113	タ	円形	0.25	0.25	-	タ	
S P2114	2・3 f	不定形	0.42	0.38	-	タ	
S P2115	4 f	円形	0.37	0.22	-	タ	
S P2116	3 f	タ	0.26	0.24	-	タ	
S P2117	タ	隅丸方形	0.29	0.26	-	タ	
S P2118	3 g	円形	0.37	0.34	-	タ	

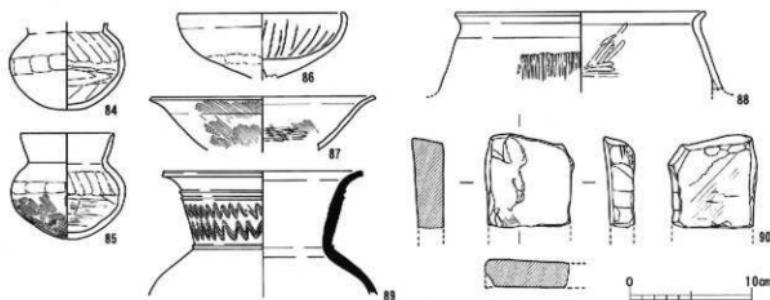
小穴・柱穴出土遺物

S P242出土遺物

3点(86・87・90)を図化した。86は土師器楕形高杯の杯部である。杯部はほぼ完存しており、口径14.5cm、杯部高5.2cmを測る。杯部内面にヘラミガキが放射状に施されている。87は土師器有稜高杯の杯部細片である。杯部内外面にハケ調整が行われている。90は板状の扁平な石材を用いた砥石で、長辺の中央部で折れている。3面に使用面があり、幅は中央部に向かって漸減している。石材は砂岩である。

S P251出土遺物

3点(84・85・89)を図化した。84・85は土師器小形丸底壺である。84は口縁部の大半を欠く。体部外面に煤が付着している。85は体部最大径が口径を凌駕している。約1/2が残存しており、口径7.6cm、器高8.7cm、体部最大径9.4cmを測る。体部外面下半にハケ調整が認められる。89は



第28図 S P242(86・87・90)、S P251(84・85・89)、S P255(88)出土遺物実測図

須恵器小形壺である。口縁部から体部中位が残存している。口径16.0cm、口頸部高6.5cmを測る。口頸部外面には上位に2条、下位に1条の突帯が廻る。突帯間に波状文を上下二段に施文している。口縁部外面に黒色の釉が塗布されている。焼成は良好・堅緻であるが、頸部および体部上半に焼け膨れが認められる。5世紀前半の初期須恵器に分類されるものと推定されるが、型式は限定できない。

S P255出土遺物

1点(88)を図化した。破面部分に把手の貼り付け部分が認められるため、韓式系土器鍋の細片と推定される。体部外面に平行タタキが施文されている。

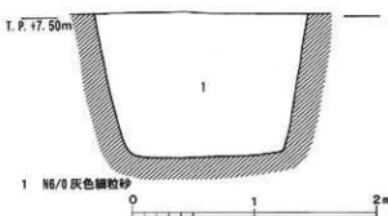
第3面

第3面は、第2面から0.2m下層(T.P.+7.5m前後)に存在する第9層5BG5/1青灰色粘土層上面を調査対象とした。調査の結果、古墳時代前期末から中期初頭に比定される溝1条(S D301)を検出した。

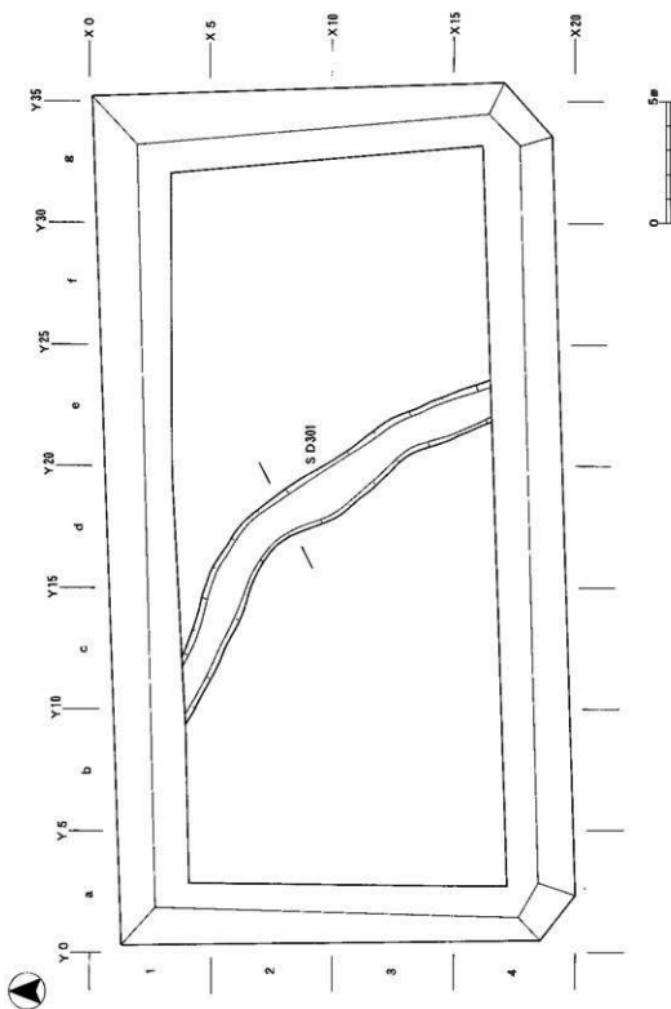
溝(S D)

S D301

調査区のはば中央部を蛇行して、北西-南東方向に伸びている。検出長19.0m、幅1.5~2.15m、深さ1.18mを測る。断面形状は逆台形状を呈している。埋土はN6/0灰色細粒砂である。遺物は出土していない。



第29図 S D301断面図(S=1/40)



第30図 第3面平面図 ($S = 1/200$)

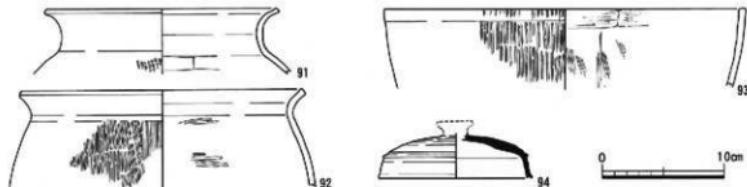
3) 遺構に伴わない遺物

第6層出土遺物

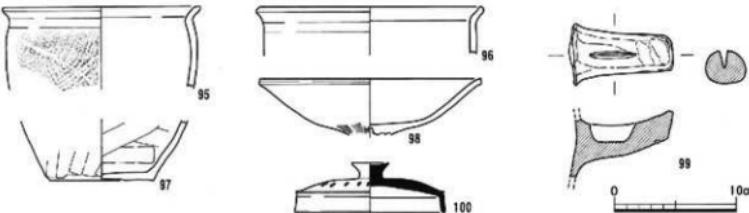
4点(91～94)を図化した。91は韓式系土器壺の口縁部細片である。92は口縁部から体部にかけての細片であるが形状からみて把手が付く韓式系土器鍋である。体部外面に平行タタキが施されている。93は韓式系土器甌の口縁部片である。体部外面に平行タタキが施されている。94は須恵器蓋杯で、つまみ部分を欠く。口径12.6cmを測る。天井部全体に自然釉が附着している。焼成は良好堅緻。色調は灰色～灰紫色である。田辺氏編年のTK73型式(5世紀前半)に比定される。

第7層出土遺物

6点(95～100)を図化した。95～97は韓式系土器平底鉢である。95・96は口縁部、97は底部である。95・96は共に体部外面に格子タタキが施されている。98は土師器高杯の杯部である。やや浅い杯部で、稜部に丸味を持つ。口径18.3cm、杯部高4.6cmを測る。杯部外面下位にハケ調整を施す。99は牛角状の把手で、端面は平坦な面を持つ。把手上面の中央部分に切れ目が施されている。100はつまみを持つ須恵器杯蓋である。口径12.4cm、稜径12.1cm、器高4.0cm、つまみ径3.1cm、つまみ高1.3cmを測る。つまみは上端が窪むもので、天井部に環状に廻る櫛描列点文が施文されている。田辺氏編年のTK73型式(5世紀前半)に比定される。



第31図 第6層 出土遺物実測図



第32図 第7層 出土遺物実測図

参考文献

- ・田辺昭三 1966 「陶邑古窯址群」 平安学園考古学クラブ
- ・田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店
- ・田中清美 1994 「鳥足文タタキと百済系土器」『韓式系土器研究V』 韩式系土器研究会
- ・広瀬和雄 1994 「6大阪府」『日本土器製造研究』青木書店
- ・藤田憲司・奥 和之・岡戸哲紀 1995 「陶邑・大庭寺遺跡IV」(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第90報 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会
- ・橋井久之 1998 「鳥足文タタキのある土器の一群」『大阪市文化財協会研究紀要創刊号』(財)大阪市文化財協会
- ・辻 美紀 2002 「第3節 河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告IX』(財)大阪市文化財協会

第4章　まとめ

今回の調査では、古墳時代前期末から古墳時代中期中葉(4世紀末から5世紀中葉)の遺構・遺物を検出した。第1・2面で検出した古墳時代中期初頭から中葉の遺構・遺物については、西接する長原遺跡の東北地区、東地区で検出されている出戸自然堤防上に展開した長原遺跡の「東集落」と有機的な関係を持つもので、長原遺跡東部から八尾南遺跡を包括した当該期の集落範囲や動態を知るうえで貴重な情報を提示している。

ここでは、今回の調査で得られた調査成果をもとに、長原遺跡の東部地区(東北・東・東南地区)で検出された当該時期の集落との関わりを推定してみたい。

今回の調査では、初期須恵器成立時期にあたるT G 232型式～T K 73型式段階に成立した居住城の中核部分を2面(第1面・第2面)に亘って検出した。

検出した2面の高低差が0.1～0.2m程度のもので、削平による改変や遺構の重複が相俟って面的な先後関係にやや齟齬する部分が認められたが、第1・2面ともに調査区の西部を中心に掘立柱建物を中心とする居住城内の中核部分を確認した。掘立柱建物は第1面で1棟(S B 101)、第2面で6棟(S B 201～206)の計7棟が検出されている。全て2間×2間規模で、法量が3～4m程度の比較的小型の建物が主体で、そのうち総柱建物が5棟を占めている。

出土遺物は総数でコンテナ箱に約12箱程度出土しており、土器類の内訳では土師器の他、韓式系土器の占める割合が高いが須恵器については、掲載した6点の他、細片を含めても50点程度である。韓式系土器については、19点を掲載した。そのなかに、S O 101から出土した鳥足文タタキメを持つ瓶(51)、鍋(52)の2点がある。鳥足文タタキメを持つ韓式系土器については田中清美氏(田中1994)他による先行研究により、朝鮮半島南西部の百濟地域との係わりを持つ韓式土器であることが明らかにされている。第9表に示したように、八尾南遺跡内での出土例は本調査の2点のみであるが、西接する大阪市の長原遺跡においては、長原遺跡東部(東北・東・東南)で古墳時代中期前半に集落域を形成した「東集落」を中心に出土している。長原遺跡では、地下鉄31工区地区のS D 03から広口壺1点、N G 16次で瓶の体部片が1点、N G 95-36次の長原7B層層準(櫻井1998)で平底鉢、瓶、鍋、甕などの6個体以上、N G 00-11次のS D 701から破片9点が出土している。時期的には、地下鉄31工区地区出土の弥生時代後期末のものを除けば、T G 232型式～T K 216型式段階のものに限定されている。そのなかで、本例出土の2点についてはN G 95-36次出土の瓶、鍋と形態・法量・タタキ板原体とともに酷似しており、同一工人により製作された可能性が高いものと推定されている。

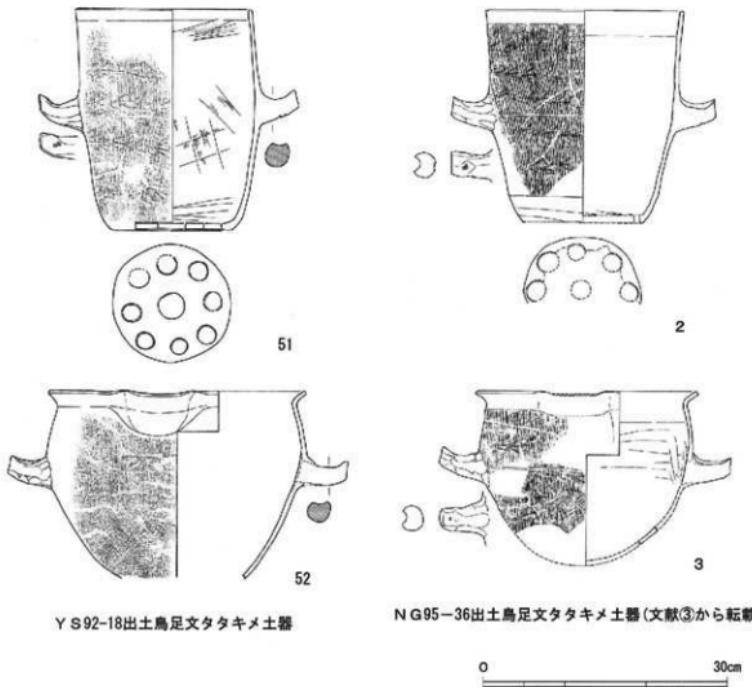
一方、鐵鍛冶に関連した遺物としては、S K 105から轆羽口、S P 242から砥石が出土している。

鍛冶に関連した遺構・遺物としては、長原遺跡内の東北・東地区で古墳時代中期前半に成立した「東集落」で検出されている。

N G 02-08次では壁立構造を持つ特殊な2棟の建物(S B 011・012)や「コ」の字形に区画された掘立柱建物2棟(S B 005・006)が検出されている。これらの建物の周囲からは、炭・焼土を廃棄した小坑が数多く検出されており、そのなかに微細な鍛錬鍛冶滓であるスラグと棒状の鉄片および叩き石が出土している。さらに、北に隣接するN G 03-6次からも、焼土・炭に混じって耐

火材として使用された石綿の集積がみられた方形区画施設(S D044)が検出されている。なお、N G95-36次においては、多数の縫羽口とともに金属学的分析で鍛錬鍛治溝が確認されており、鍛治工程からN G95-36次のものが高温沸し鍛接溝、N G02-08次のものが低温型溝とされており、集落内の工房で高温鍛接から低温成形・加工の一連の鍛錬鍛治が行われていたことが想定される。本調査においては、第2面で検出した「コ」の字状に廻るS D215の内側部分が、N G02-8次で検出された鍛治工房の平面形状と類似する点が見られたが、周辺からは鍛治関連に伴う炭・灰・焼土・鍛錬鍛治溝等は検出されていない。

以上のように、本調査では、豊富な韓式系土器、縫羽口から推定される鍛治工房の可能性、滑石製玉類、製塩土器等の出土遺物が認められた。これらの居住域内の諸内容は、長原遺跡のN G03-6次、N G02-08次、N G95-36次を中心として、T G232型式段階に成立した長原遺跡の「東集落」と多くの共通点を有しており、本調査区一帯も長原遺跡の「東集落」を構成した居住域の一つであったと推定され、韓式系土器や鍛治関連遺構・遺物から勘案して、新来技術を招来した百濟系を中心とした渡米系の技能集団の集落であったことが想定される。



第33図 八尾南遺跡(Y S92-18)と長原遺跡(N G95-36)出土の鳥足文タタキメを持つ土器(S=1/6)

第9表 八尾南・長原遺跡出土鳥足文タタキメ土器一覧表

番号	遺跡名	略号	出土遺構	掲載番号	器種					タタキメ	共伴遺物	時期	備考・文献	
					壺	鉢	瓶	鍋	壺					
1	八尾南	YS92-18	S0101	51			●			C	1.6/2.0	土師器・須恵器	近2段階新 T G232	本書
2	タ	タ	タ	52				●		C	1.6/2.0	タ	近2段階新	
3	長原	31工区	SD03	129	●					A	4.0/3.0	弥生土器	V様式米	文献①
4	長原	NG16		9					●	C	1.6/1.6	土師器・須恵器	近3段階 TK73・216	破片
5	長原	NG95-36	7B層標準	1		●				C	-	土師器・須恵器・陶質土器・石製品	近2段階新 T G232	文献③
6	タ	タ	タ	2			●			C	1.7/1.8	*	*	
7	タ	タ	タ	3				●		C	1.7/1.8	*	*	
8	長原	NG00-11	SD701	197					●	C	-	土師器・須恵器・鉄製品・石製品	近3段階 TK216	破片、文献④
9	タ	タ	タ	198					●	C	1.5/1.5	*	*	破片
10	タ	タ	タ	199					●	C	1.8/2.0	*	*	破片
11	タ	タ	タ	200					●	A	2.0/2.0	*	*	破片
12	タ	タ	タ	201					●	-	-	タ	破片、単位不明	
13	タ	タ	タ	202					●	-	-	タ	破片、松葉状	
14	タ	タ	タ	203					●	-	-	タ	破片、松葉状	
15	タ	タ	タ	204					●	B	-	タ	破片	
16	タ	タ	タ	205					●	C	-	タ	破片	

鳥足文の分類は田中清美氏の分類(田中1994)による。タタキメ数値は実面図の拓本によるもので、原体の単位を示すものでない。遺物の帰属時期は辻美紀氏の標準(辻1999)を参考とした。

参考文献

- ①田中清美 1994 「鳥足文タタキと百済系土器」『韓式系土器研究V』韓式系土器研究会
- ②櫻井久之 1998 「鳥足文タタキのある土器の一群」『大阪市文化財協会研究紀要 創刊号』 財團法人 大阪市文化財協会
- 〔第9表内文献〕
- ③31工区 1982.3改訂『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告』長原遺跡調査会・(財)大阪市文化財協会
- ④N G16次 田中清美 1985「長原遺跡出土の特異なタタキのみられる土器について」『考古学論集 第1集』考古学を学ぶ会編
- ⑤N G95-36次 1998. 4 櫻井久之「鳥足文タタキのある土器の一群」『大阪市文化財協会 研究紀要 創刊号』(財)大阪市文化財協会
- ⑥N G00-11次 2002.3 『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告 IX』(財)大阪市文化財協会
- ⑦N G02-8次 2005.3 『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告 X II』(財)大阪市文化財協会
- ⑧N G03-6次 2005.3 『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告 X II』(財)大阪市文化財協会

図 版



第1面 全景(西から)



北西部遺構検出状況(西から)

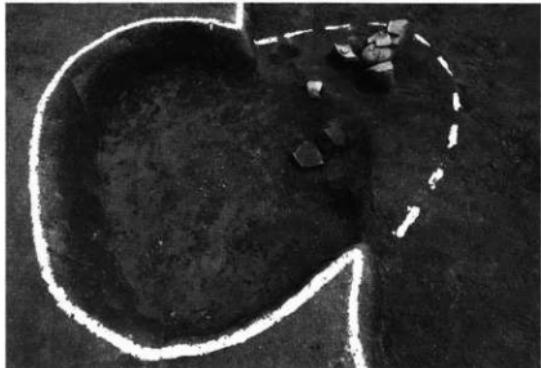
図版二（第1面）



S K103~105検出状況(西から)



S K107検出状況(北から)



S K111検出状況(西から)



SD 101、SD 102検出状況(東から)



SD 101東部遺物出土状況(南から)



SD 101東部遺物出土状況(南から)



S O 101他検出状況(西から)



S O 101東部遺物出土状況(南から)



第2面全景(西から)



S B202、203検出状況(東から)

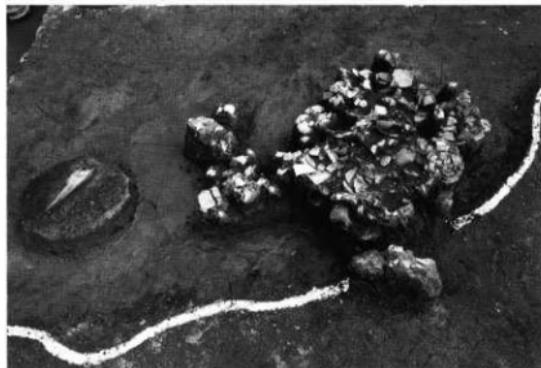
図版六（第二面）



S K201検出状況(西から)



S K208検出状況(東から)



S K208遺物出土状況(西から)



S K209検出状況(東から)



S K209遺物出土状況(東から)



S D301検出状況(西から)



2



4



3



5



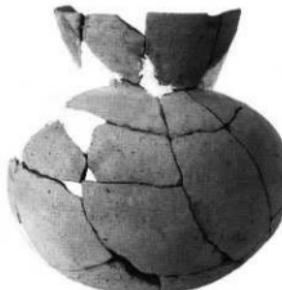
1



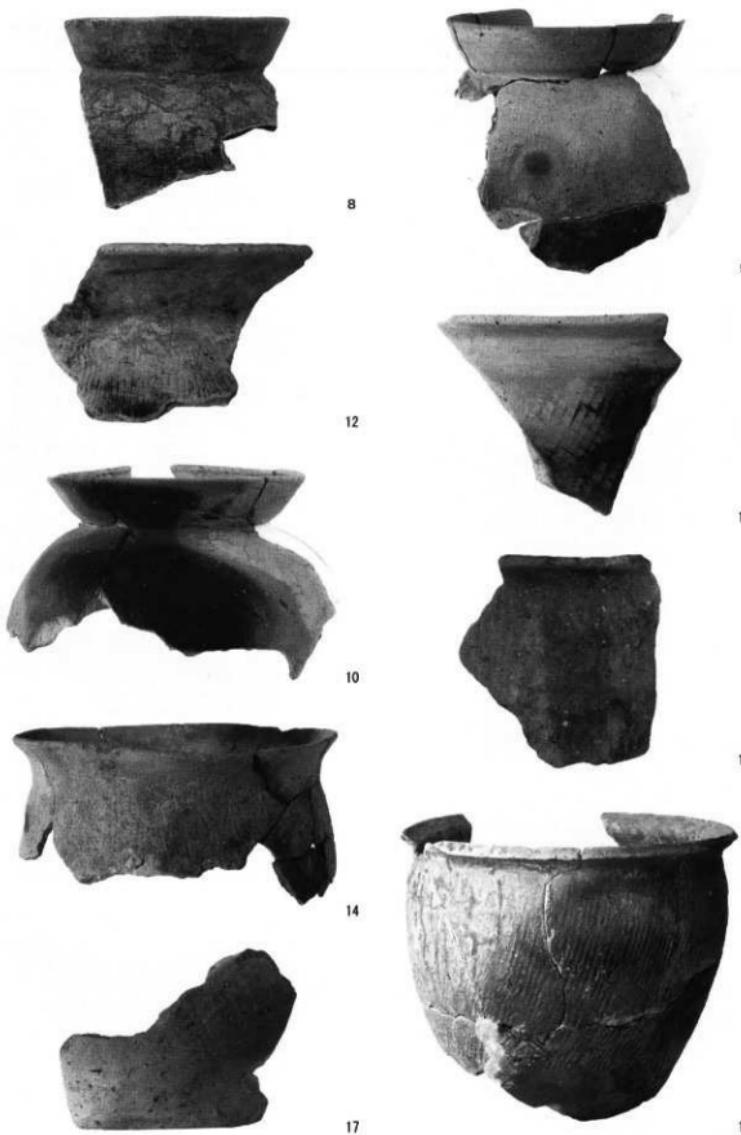
6



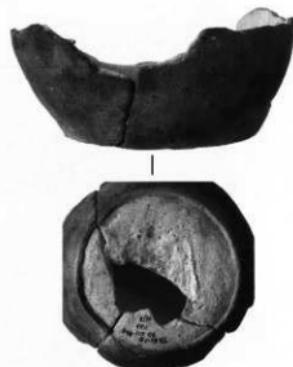
7



SK105(1)、SK107(2・3)、SK111(4)、SD101(5～7)出土遺物



SD101(8~10・12~17)出土遺物



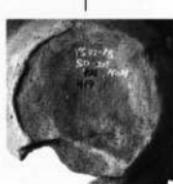
18



21



24



19



25



20



22



26

S D 101(18~22・24~26)出土遺物



27



32



28



33



34



29



35



30

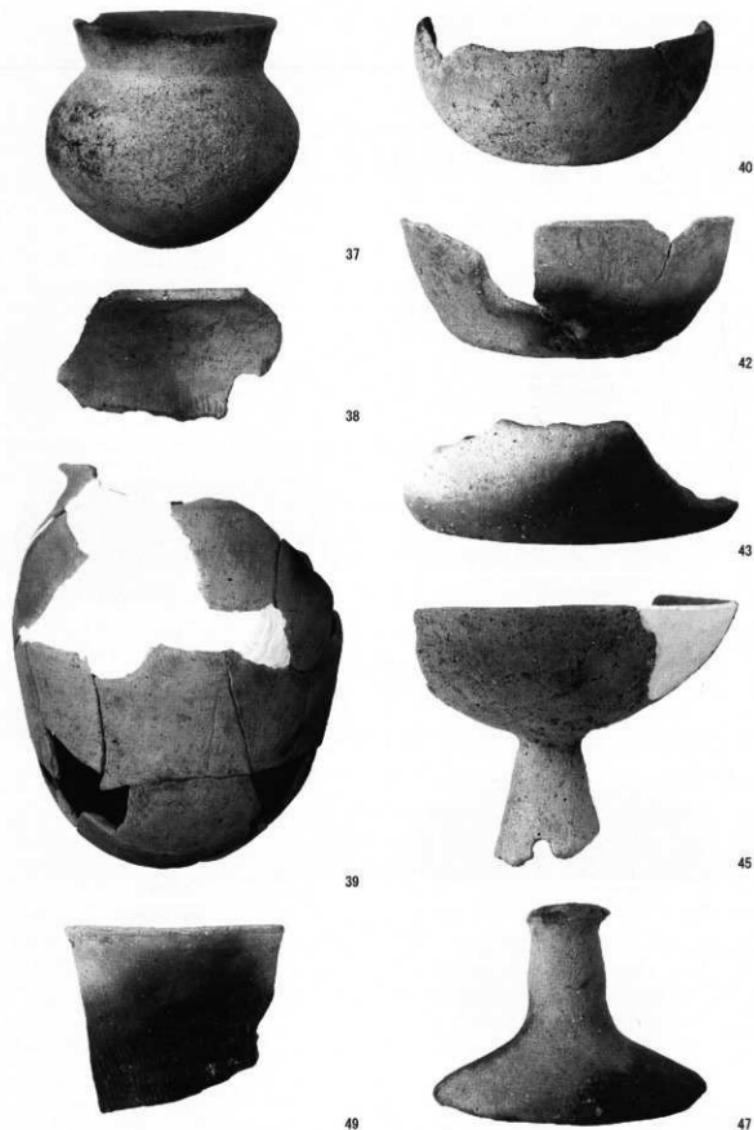


31

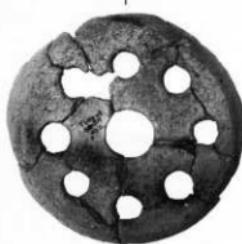


36

S D 101(27~31)、S D 102(32~36)出土遺物



S O 101(37~40・42・43・45・47・49)出土遺物



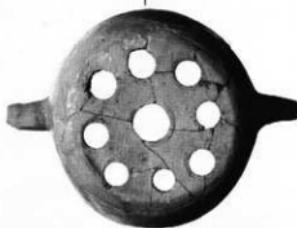
50



52



53



54



55



56

S O 101(50~53)、S K 208(55・57)出土遺物



58



61



59



62



60



63

○

64

○

65

○

66

○

67

○

68

○

69

○

70

○

71

○

72

○

73

○

74

○

75

○

76

○

77

○

78

○

79



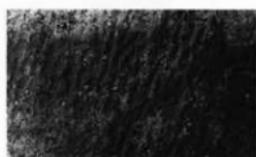
80



85



86



88



89



90

S K209(81)、S D208(82)、S P242(86・90)、S P251(85・89)、S P255(88)出土遺物



91



97



93



98



94



100



95



99



96



第6層(91・93・94)、第7層(95~100)出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく117
著名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告117
副書名	八尾南遺跡第18次発掘調査報告書 -大阪防衛施設局共同住宅建て替え工事に伴う-
巻次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	117
編著者名	原山昌則
叢書機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2008年9月30日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
八尾南遺跡 (第18次調査)	大阪府八尾市西木の本二丁目	27212	67	35° 03'	135° 34'	1992.08.17～ 1992.09.26	約400	共同住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八尾南遺跡 (第18次調査)	集落	古墳時代中期初頭～前半	掘立柱建物・井戸・土坑・小穴・溝・落込み状遺構	土師器・船式系土器・初期須恵器・鍛冶関連遺物(輪羽口)・玉類(滑石製勾玉・白玉)・砥石	

要約	八尾南遺跡の北西部に位置する古墳時代中期初頭から前半の居住域である。八尾南遺跡のなかで、古墳時代中期初頭段階に成立した最も古い居住域で、韓式系土器の多さや初期須恵器、鍛冶に関連した遺物の出土から長原遺跡の東地区・東北地区を中心とした渡来系を中心とする長原遺跡の「東集落」との関わりが推定される。
----	---

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告117

八尾南遺跡第18次発掘調査報告書

-大阪防衛施設局共同住宅建て替え工事に伴う-

発行 平成20年9月
編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 佛近畿印刷センター
〒581-0033 八尾市志紀町南2丁目131番地
TEL 072-920-3488
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
国版 ニューエイジ <110Kg>

